JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

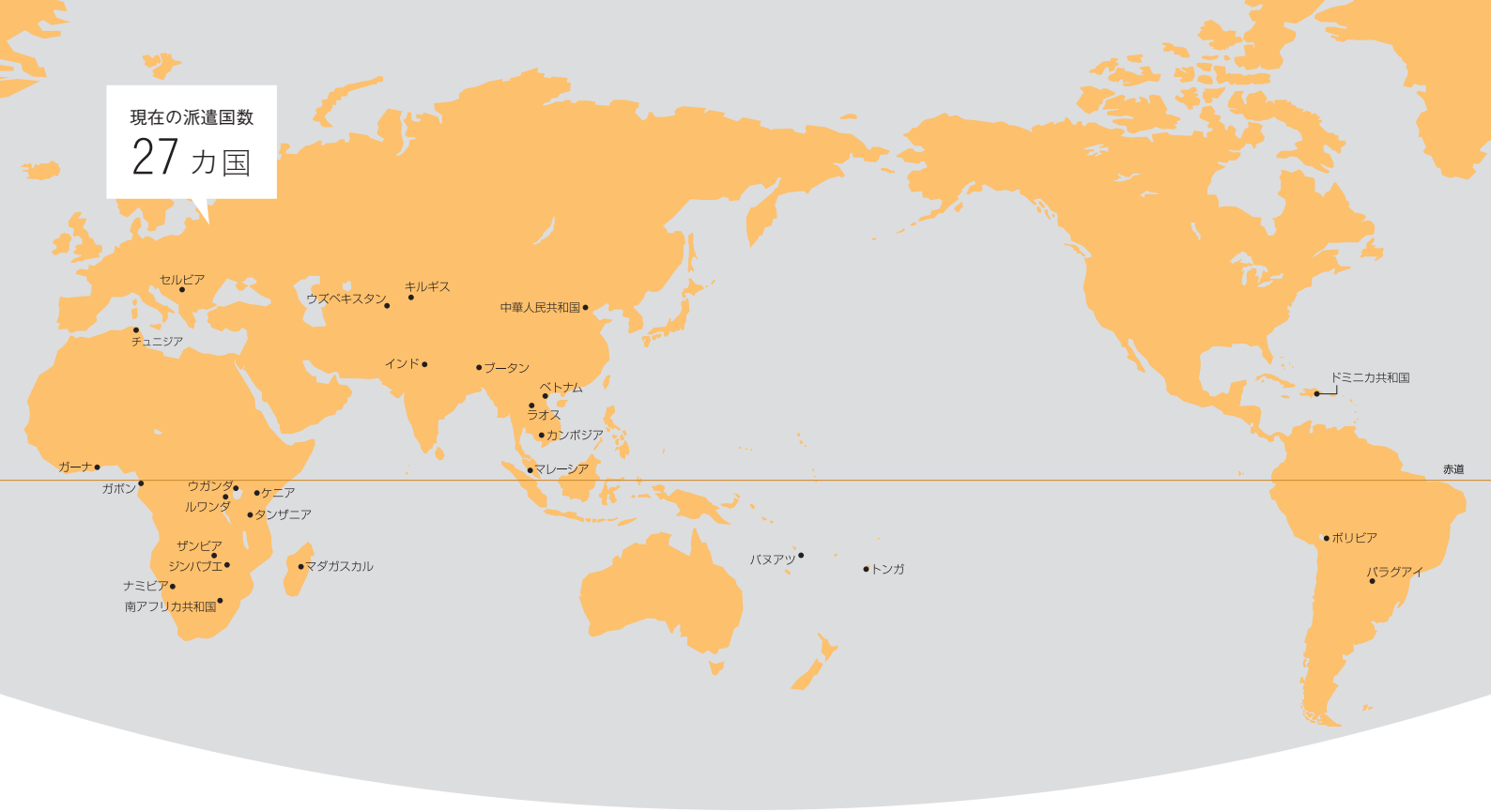
7

2021 JULY

特集

“任期序盤”の過ごし方

派遣国の横顔 ～ペルー～



JICA海外協力隊 派遣現況

（2021年5月末現在、単位：人）

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	5	
ガーナ	10	
ガボン	4	
ケニア	8	
ザンビア	3	1
ジンバブエ	5	
タンザニア	3	
ナミビア	1	
マダガスカル	2	
南アフリカ共和国	1	
ルワンダ	11	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	5	
ウズベキスタン	2	
カンボジア	4	
キルギス	2	
中華人民共和国	3	
ブータン	1	
ベトナム	2	
マレーシア		2
ラオス	12	2

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
トンガ	1	
バヌアツ	1	

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	1	

■ 中東地域

国名	一般	シニア
チュニジア	1	

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
ドミニカ共和国	9		3	
パラグアイ	1			
ボリビア	1			

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 （男性／女性）	99 （55／44）	5 （4／1）	3 （2／1）	0	107 （61／46）
累計 （男性／女性）	45,803 （24,319／21,484）	6,555 （5,300／1,255）	1,542 （597／945）	547 （252／295）	54,447 （30,468／23,979）

一般＝青年海外協力隊／海外協力隊
シニア＝シニア海外協力隊
日系一般＝日系社会青年海外協力隊／日系社会海外協力隊
日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2021 JUL.

Contents

4 **JICA Volunteers' Reports**
▶協力隊経験者などが各国の野球事情を発信する公開講座がスタート（日本）
▶同期のコスタリカ隊員3人で同国産コーヒーを輸入・販売する会社を設立（日本）

派遣国の横顔
～ペルー～

6 **人的資源**
細川椎菜さん（青少年活動・2018年度1次隊）

8 **人的資源**
松下芽依さん（環境教育・2018年度1次隊）

特集
"任期序盤"の過ごし方

10 **時間を共有**
酒井実希さん（東ティモール・理学療法士・2018年度1次隊）

12 **思いを伝える**
小寺麻里菜さん（パナマ・コミュニティ開発・2018年度1次隊）

14 **顔を売る**
木村正樹さん（ベリーズ・環境教育・2017年度3次隊）

16 **課題の調査**
馬場千穂さん（インド・日本語教育・2018年度1次隊）

18 **"失敗"から学ぶ**
楠本 薫さん（南アフリカ共和国・小学校教育・2018年度1次隊）

20 **希少職種図鑑**
▶金融　經澤伸一郎さん（シニア海外協力隊員／ウズベキスタン・2016年度4次隊）
▶ソフトボール　中村藍子さん（ボツワナ・2016年度3次隊）

22 **JICA海外協力隊的プチテクガイド**
ボッチャ入門／デンタルケアの基本

24 **JICA Volunteers' Before ▸ After ～人生を変えた2年間～**
吉本興業所属の芸人 石川 洸さん（セネガル・村落開発普及員・2013年度1次隊）

26 **帰国後よもやま話**
日本語教育分野隊員篇

28 **Pick Up OB・OG会**
▶青年海外協力隊東京OB会
▶ICT海外ボランティア会

30 **先輩隊員のシューカツ記**
フジクリーン工業株式会社 社員　宮野幸恵さん（ソロモン・PCインストラクター・2016年度2次隊）

32 **JOCV SPORTS NEWS**

34 **JICA海外協力隊のつぶやき**
お題：「身だしなみ」

35 **INFORMATION**

36 **隊員めし**
インドネシアの牛肉スープ「チョト・マカッサル」

■職種別索引

	掲載ページ
コミュニティ開発	12
村落開発普及員	24
金融	20
青少年活動	6
環境教育	8、14、36
ソフトボール	21
野球	4
PCインストラクター	30
日本語教育	16、26
日系日本語学校教師	26
体育	32
小学校教育	18
料理	36
理学療法士	10

■国別索引

	掲載ページ
インド	16
インドネシア	36
ウズベキスタン	20
コスタリカ	4
セネガル	24
ソロモン	30
パナマ	12
東ティモール	10
ブータン	32
ベリーズ	14
ペルー	6、8、36
ボツワナ	21
南アフリカ共和国	18

■出身都道府県別索引

	掲載ページ
群馬県	12
埼玉県	18
千葉県	14、21、30、32
東京都	10、20、28
静岡県	6
新潟県	24
兵庫県	16
奈良県	8

【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2021年度1次隊）
氏名　派遣国　職種　隊次

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：（株）AND
レイアウト：（株）AND
印刷・製本：弘報印刷（株）

JICA Volunteers' Reports

JICA海外協力隊とその経験者による国内外での注目の活動をご紹介します。

Japan

協力隊経験者などが各国の野球事情を発信する公開講座がスタート

文＝後田剛史郎（宮崎大学企画総務部総務広報課広報係長／スリランカ・野球・2004年度1次隊）

講座の概要	
日　程	［前期（全10回）］ 2021年4月28日（水）～9月22日（水） ［後期（全10回）］ 10月13日（水）～2022年2月23日（水） ※毎月第2・4水曜日の19:00～20:30
方　法	Web会議
受講料	2000円（各期）
定　員	一般50人（各期） ※前期は定員に達したため申込受付終了。後期の申込受付は9月下旬を予定。
テーマ（予定）	［前期］スリランカ／ブルキナファソ／コスタリカ／タンザニア／オーストリア／フィジー／バングラデシュ／ニカラグア／ウガンダ／ハンガリー ［後期］ネパール／南スーダン／インドネシア／ジンバブエ／タイ／ブラジル／ポーランド／ボツワナ／ベトナム／総括
ウェブサイト	

2021年6月9日に行われた第4回の講座で、開始の「プレーボール」を唱和する参加者たち。最上段の右から3つめの枠が後田さん

私が職員として勤務する宮崎大学では、地域と連携しながら大学と地域の双方を発展させることを目的に「産学・地域連携センター」を設置し、その事業の一環として国際協力で活躍できる人材の育成にも取り組んでいます。2021年4月には、各国の「野球」の事情についてシリーズで紹介する月2回の公開講座を同センターで開始しました。全20回の予定で、講師は協力隊員として途上国で野球の指導・普及に取り組んだ方が中心です。コロナ禍で「留学」など若い世代の人たちが海外を知ることができる機会が限定されているなか、困難な社会状況だからこそ未来を担う世代が世界に目を向け、世界に羽ばたいてほしいというのが、本講座の狙いの1つです。

講座は毎回1カ国をテーマに設定し、文化など一般的な情報も交えながらその国の野球事情を紹介するという内容です。6月までに、スリランカ、ブルキナファソ、コスタリカ、タンザニア、オーストリアをテーマとする講座を実施しました。初回のスリランカ篇では、野球隊員として04～06年に同国で活動した私も講師の1人として当時の体験を紹介しました。そのときの私の教え子で、現在は宮崎大学大学院博士課程で野球の動作解析などの研究に取り組んでいるニローシャン氏にも、これまでの野球人生を語ってもらうなどしました。それにより、同国の野球について15年あまりにわたる流れを知っていただける講座となりました。同国では09年まで内戦が行われていましたが、近年は、当時敵対する立場にあった民族の人たちが共に参加する野球教室が開かれています。その情報を直近で派遣されていた野球隊員が紹介したところ、受講者からは「途上国でスポーツを普及することの意義がようやくわかった気がする」といった感想を寄せてもらいました。

北海道から沖縄まで、日本各地で暮らす約100人の方々に受講いただけており、オンライン講座の強みを実感しています。受講いただいている方の層は幅広く、高校野球の選手・指導者・審判員、協力隊経験者、一般の野球ファンの方々などです。夕飯時の開催なので、夕飯をとりながらお子さんと一緒に受講されている方もおり、このように受講者の層が広がるのもオンライン講座の利点だと感じています。

本講座を通じて、海外の野球に何らかのかかわりや関心がある講師や受講者の方々との間に、それまでになかったネットワークが生まれており、それも本講座の重要な意義だと考えています。今後もますます、講師や受講者の間でさまざまな化学反応が起こり、「野球」「スポーツ」「国際協力」といった領域への新たな刺激につながることを期待しています。2021年9月までの前期日程はすでに定員いっぱいの受講申込をいただいているため、新たな受付はできませんが、興味をお持ちいただいた方は、9月下旬に申込受付を開始する予定の後期10回の講座の受講を、ぜひご検討いただければと思います。

Japan

同期のコスタリカ隊員3人で同国産コーヒーを輸入･販売する会社を設立

文＝大島 愛（NatuRica合同会社代表社員／コスタリカ・作業療法士・2016年度1次隊）

上：モルフォが開いた介助者を養成する研修会の受講者とモルフォのスタッフ、モルフォで活動していた松本静香さん（後列右から2人目）、大島さん（後列右から3人目）
左：コスタリカ産の木製マグカップ、コーヒー粉、ドリップパックをセットにした商品

会社概要	
名　称	NatuRica合同会社
設　立	2020年10月
事務所	東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F
代表社員	大島 愛（コスタリカ・作業療法士・2016年度1次隊）
協力メンバー	●松本静香（コスタリカ・マーケティング・2016年度1次隊） ●日髙夏希（コスタリカ・環境教育・2016年度1次隊）
事　業	コスタリカ産コーヒーの輸入・販売
連絡先	hola@naturica-cr.com
ウェブサイト	

2020年10月に、コスタリカ産コーヒーの輸入・販売を行うNatuRica（ナチュリカ）合同会社を同期のコスタリカ隊員2人と立ち上げました。目的は、サンホセ州ペレス・セレドン市で身体障害者の自立に向けた活動に取り組む団体「モルフォ」を支援することです。コスタリカの農業協同組合「コーペ・アグリ」が現地で焙煎・パッケージングしたコーヒーをモルフォの仲介を経て当社が輸入・販売し、売り上げの一部をモルフォに仲介料としてお渡しする仕組みをとっています。

モルフォが行っている主な活動は、障害者についての理解を広めるための啓発活動、介助者の養成、車椅子の修理や車椅子クッションの作成などです。当社の設立メンバーの1人が協力隊時代、車椅子工房設立の支援などをモルフォで行っていました。私の任地はほかの地域にありましたが、作業療法士として見聞を広めたいと思い、任期中に何度かモルフォを訪ね、彼らの活動の話を聞いたりしました。帰国後、車椅子の修理技術を学ぶために来日したモルフォのスタッフと再会。その際、活動に対する彼らの熱い思いをあらためて聞いたことから、日本からモルフォを支援する活動がしたいと考えるようになり、設立メンバー2人と相談しました。そうして、日本のNPO法人「メインストリーム協会」がモルフォ支援の一貫としてこれまで行っていたコスタリカ産コーヒーの輸入・販売を引き継がせていただくことになり、その運営を行う会社を設立するに至りました。

事業開始にあたっては、クラウドファンディングを利用しました。168人の方から総額約150万円のご支援をいただくことができ、そのおかげで2021年の2月と6月にまとまった量のコーヒーを輸入することができました。

当社の特色として、コーペ・アグリやモルフォなど生産や流通にかかわる方々と顔が見える形で取引しているため、商品の信用性について自信を持って消費者にお伝えできる点が挙げられるかと思います。また、コーペ・アグリは環境保護にも力を入れており、コーヒーの生産過程で出る廃棄物や温室効果ガスを減らすことにも取り組んでいます。そうした取り組みは、コーヒー生産の持続可能性のために非常に重要だと考えています。

現在はオンラインを中心に販売しており、ありがたいことに味について大変な好評をいただいています。ただし、まだ売り上げは安定していないのが実情です。今後は徐々にスーパーや飲食店などへの卸売に販路を拡大していく予定です。まだまだスタートしたばかりの事業ですが、継続的にモルフォを支援していくために、日本の多くの方にコスタリカ産コーヒーの魅力を知ってもらうよう努めていきたいと考えています。

空輸されたコーヒーを成田空港の倉庫で受け取る大島さん

派遣国の横顔

JICA海外協力隊の派遣国ごとに、それぞれの代表的な職種・分野の活動例を、任地の文化や様子と共に紹介します。

ペルー

Field 1
人的資源

細川椎菜（ほそかわしいな）さん
（青少年活動・2018年度1次隊）

PROFILE

1995年生まれ、静岡県出身。短期大学で保育士の資格と幼稚園教諭免許状を取得した後、児童養護施設に3年間勤務。2018年7月に青年海外協力隊員としてペルーに赴任（現職参加）。20年3月に帰国し、復職。

活動概要

エルメリンダ・カレラ児童保護施設（リマ県リマ市）に配属され、主に以下の活動に従事。
●日本の文化を体験する講座の運営
●壁画を制作するプロジェクトの実施（他隊員との協働）

女性対象の児童保護施設で日本の文化を体験する講座を運営

首都にある児童保護施設に配属され、日本文化を体験する講座を立ち上げた細川さん。任期後半になってから教えるようになった「折り紙ピアス」は、配属先の職員がこぞって買ってくれるようなものがつくられるまでになった。

細川さんが配属されたのは、首都リマ市にある女性対象の児童保護施設。保護者による養育が困難な11～18歳の児童に居住の場、食事、学校教育、放課後の講座などを無償で提供する公的施設である。約120年前にカトリックの修道会によって設立されたもので、現在はペルー女性社会的弱者省が所管する。敷地には8つの居住棟、小学校、中等学校、講座用の施設があり、児童は配属先に置かれた学校に通っていた。細川さんの着任当時の児童数は約140人で、職員数は約60人。配属先から求められていたのは、講座の充実化を支援することだった。

児童の入所理由で目立ったのは「家庭の貧困」だ。兄弟姉妹が多く家計が苦しいために長女だけが入所しているといった、細川さんが派遣前に働いていた日本の児童養護施設では見られなかったケースもあった。また、交通事故により一家の大黒柱である父親を亡くし、家計が苦しくなったから入所したという地方出身者も少なくなかった。ペルーの地方農村部は整備されていない道が多く、バスが崖から転落する事故などが頻発していた。

児童の入所理由は日本の児童養護施設との違いが大きいと感じたが、児童の「家族が恋しい」という気持ちは共通だった。日本の児童養護施設で七夕のイベントを開くと、児童の大半が短冊に「家族の元に帰りたい」と書いた。細川さんは協力隊時代も配属先で七夕のイベントを開いたが、やはり児童の大半が短冊に書いたのは、「家族の元に帰りたい」という言葉だった。

居住棟巡りで関係づくり

配属先で講座が開かれるのは月・水・金曜日で、時間は午後3時からの1時間半。細川さんの着任当時、裁縫やパソコン、ダンス、音楽など多彩な講座が開かれており、児童はそれぞれ興味を持った講座を自由に選んで受講できることとなっていた。そうしたなかで細川さんは、新たな講座を立ち上げ、自力で受講者を確保することを配属先から求められた。

その準備のために行ったのは、授業や講座が終わって児童たちが居住棟でゆっくりしているところを訪ね、おしゃべりをして人間関係をつくることだ。細川さんは配属先で初めて働く日本人。そのため当初は物珍しさから、児童たちは興味津々に細川さんを取り囲み、コミュニケーションをとってきた。その際、日本の写真を見せたり、漢字を書いてみせたり、折り紙を折ってみせたりすると、大いに盛り上がった。しかし飽きられるのも早く、居住棟を訪れた細川さんのもとに寄ってくる児童は回を重ねるごとに減っていった。

そんななかで、いつも寄ってきてくれる常連が2人おり、彼女たちはやがて「将来、日本に行ってみたい」などと日本への興味の高まりを口にするようになった。そんな様子を見て細川さんは、「日本人」であることこそ、ほかの職員にない自分の特徴だと実感。新たに立ち上げる講座は、日本の文化を体験してもらうものとすることにした。常連の2人も「必ず講座に通う」と約束。彼女たちはその後、講座で扱うネタを決める際にはいつも相談役となってくれた。

折り紙ピアスが大好評に

細川さんが講座をスタートさせたのは、着任の約半年後。実際に指導したのは、折り紙、日本語、書道、白玉団子づくり、ソーラン節などだ。受講者は常時6、7人ほど。一貫して通い続けてくれたのは、前述の2人だった。

受講者に特に好評で、配属先の反響も大きかったのは、任期の半ばごろから継続して行うようになった「折り紙ピアス」の制作だ。通常の折り紙を16分の1の大きさに切り分け、小さな鶴や手裏剣などを折ってピアスの金具にぶら下げるものである。小さな紙をきれいに折るのは容易ではなく、上手にこなせるのは一部の児童に限られた。そこで、紙を折るのが得意ではない児童には「金具をペンチで曲げる」「マニュキュアを塗ってコーティングをする」などほかの工程を担当してもらい、「分業制」で進めることとした。質の良いものをつくることができるようになると、その後の材料費を調達するため、配属先の職員たちに販売。すると大変な好評で、ほぼすべての職員が買ってくれた。なかには、5、6個買ってくれたり、「次はこういう柄のものを」とリクエストしてきたりする職員もいた。

任期の終盤には、講座に通い続けた2人のうちの1人（以下、Aさん）が、新たに折り紙ピアスづくりに参加するようになった児童の指導役を買って出てくれた。Aさんは当時16歳。まだしばらく施設での暮らしが続くことから、Aさんが講座を主導する役目を引き継いでくれる可能性が見えてきたところで、細川さんの任期は終了となった。

Aさんは交通事故で父親と弟を亡くし、地方農村部で暮らす祖母と母親の元を離れて入所。大学に進学できるほど学業が得意というわけではないため、退所後は実家に戻る可能性が高い。そういう児童が、人格形成の重要な時期に異文化に出会い、熱中する経験ができたことは、人生にきわめて大きな意味を持つはずであり、それをアシストしたことは、協力隊員としてできた最大の貢献だったかもしれない――細川さんはそう考えている。

❶折り紙ピアスづくりの講座で受講者がつくった作品
❷折り紙ピアスづくりの講座で、ペンチを使って折り紙の細部を整える受講者

細川さんが行った白玉団子づくりの講座

任地ひとロメモ
〈リマ県リマ市〉

ペルーの首都で、1000万人を超える人口を擁する大都市。16世紀にインカ帝国を征服したスペイン人により、太平洋岸の砂漠地帯につくられた街だ

右：野菜と果物が豊富に並ぶ市内のスーパーマーケット
左：チキンの炭火焼きにフライドポテトやサラダを添える、クリスマスの定番料理

Field2
人的資源

まつした めい
松下芽依さん
（環境教育・2018年度1次隊）

PROFILE

1991年生まれ、奈良県出身。大学卒業後、総合建設会社で営業職に従事。2018年7月、青年海外協力隊員としてペルーに赴任。20年3月に一時帰国し、同年7月に任期終了。

活動概要

サン・マルティン県サン・マルティン郡の役場に配属され、主に以下の活動に従事。
●小学校・中等学校・大学・市場などでのごみに関する環境教育の実施
●住民を対象とする環境啓発イベントの企画・運営

ごみの減量化に向け 小学校や中等学校などで 環境教育授業を実施

最終処分場の延命に向け、ごみの減量化への取り組みを強化しつつあった郡役所に配属された松下さん。活動の中心となったのは、学校や地域でごみの減量化に対する意識を持ってもらうための環境教育を行うことだった。

松下さんが配属されたのは、内陸のアマゾン地域に位置するサン・マルティン県サン・マルティン郡の役場。郡内最大の町である人口約14万人のタラポト市で、学校などを回ってごみに関する環境教育を行うことが、求められていた役目だった。

松下さんが活動した時期は、ごみに関する市の状況が変化している最中だった。着任当時、配属先が収集したごみは、最終処分場となっていた郊外の窪地に投棄していた。ごみの中の有害成分を含む浸出水が地下水を汚染する可能性があるなど、衛生上の問題がある「オープンダンピング」と呼ばれる処分方法である。しかし、着任の約1年後には、衛生上の問題がないよう管理された新たな最終処分場が竣工。浸出水による地下水の汚染を防ぐために遮水シートを敷くなどした施設である。

最終処分場の延命化を図るために配属先が行うごみの再資源化の事業も、松下さんの任期中に変化した。最終処分場に投棄されるごみの7割は生ごみというなか、着任した当時、配属先は市場で出る生ごみを分別収集し、最終処分場の脇の空き地で堆肥化することを小さな規模で試験的に行っていた。それが、新たな最終処分場と共にその脇に屋根付きの堆肥化用施設が設けられたことから本格化。生ごみの分別収集の範囲も一般家庭へと広げられた。ペットボトルについては、着任当時はもっぱら民間の業者が首都のリサイクル業者に販売する目的で分別収集していたが、新たな最終処分場が出来てからは、業者が収集しきれない分を取りこぼさないため、希望する家庭は配属先が分別収集することになった。

高倉式コンポストの授業を実施

このように配属先がごみを再資源化する事業を活発化させるなか、その効果を高めるために必要だったのが、ごみを出す側である住民の「分別」に対する意識を高めることだ。松下さんが取り組んだ環境教育は、主にごみの減量化に関する理解を深めてもらうものだった。

環境教育は、配属先の担当職員やインターンと共に行った。市場や各家庭を回ったり、イベントでブースを設けたりして生ごみを分別して出すよう促すこともあったが、メインの活動となったのは、学校で環境教育の授業を行うことだった。任期の前半は、合わせて25の小学校・中等学校・大学で、ごみを正しく分別するアクティビティなどを行う授業を単発で実施した。

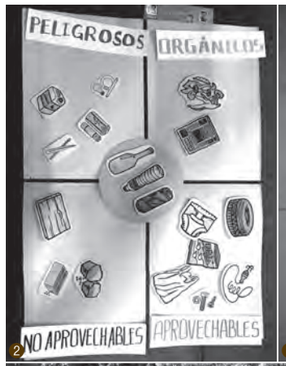
任期の後半に入ると、高倉式コンポストの普及を進めたいというペルー環境省の意向を受け、配属先は松下さんたち環境教育チームに対し、学校での環境教育授業ではそれについて指導するようリクエスト。生ごみを堆肥化する方法の1つで、果物の皮などから摂取・培養した発酵菌を使うことで、短期間で堆肥化させることができる点などを特徴とするものだ。松下さんは環境省が実施した高倉式コンポストの指導者を養成する研修を受講したうえで、4週にわたって週に1回ずつ授業を行うプログラムを考案。5つの中等学校の1クラスで実施した。対象とした学校は、配属先が指定した学校や、前述の環境省の研修に教員が参加していた学校などだ。

高倉式コンポストの方法を子どもたちに伝えても、手間がかかる作業なので、彼らがその後実践し続けてくれる可能性は薄いだろうと松下さんは感じていた。そこで、少なくとも授業での経験を通して「生ごみの堆肥化は自分事なのだ」との理解を持ってもらうべく、1回目の授業はまるまる「導入」としてその解説に充当。タラポト市の古い方の最終処分場の写真を見せながら、写真に映っているさまざまな種類のごみが分解されるまでにどれくらい長い期間がかかるか、タラポト市の家庭で出るごみの多くは生ごみであること、最終処分場がすぐにいっぱいになってしまわないようにするためには生ごみを減らすのが有効なこと、その手段の1つとして生ごみを堆肥化して利用するというものもあること、などを解説していった。

「参加型」で授業への興味を刺激

着任当初、配属先の同僚たちが地域のイベントなどで環境啓発を行う際、「講義形式」で終始することが多かった。見ていると、集まっている人たちは次第に携帯電話をいじり始めたり、眠り始めたりしており、「ここの人たちは黙って人の話を聞くことは苦手なのだ」と松下さんは感じた。一方、自分自身が学校などで環境教育授業を行い始めた当初は、スペイン語の力も十分ではなかったため、長い時間講義をし続けることはもとより困難だった。そこで松下さんは授業にアクティビティを多く取り入れ、「参加型」となるよう工夫するようになった。すると、受講者たちは期待どおり楽しそうな表情を見せてくれた。

特に受講者の反応が良かったのは、オリジナルのジェスチャーゲームだ。日本の「落ちた落ちたゲーム」のように、出された単語に対応するジェスチャーをしていくゲームである。高倉式コンポストの授業でもこれを取り入れた。「空気」「水分」「食べ物」をそれぞれ違う紙にイラストで表現したものを用意し、それぞれについてどのようなジェスチャーが対応するかを決め、生徒たちに伝えておく。そうして、手拍子をとりながら松下さんと生徒たちが「私たちは決まり事を守る」と掛け合いをした後、いずれかのイラストを松下さんが提示したら、生徒たちは提示されたものに対応するジェスチャーをしていく。「空気」「水分」「食べ物」は生ごみを分解する菌が生きるのに必要なもの。高倉式コンポストの作業では、菌と生ごみを合わせた後に「空気を取り込むためにかき混ぜること」「程よい水分を加えること」「野菜などを入れること」の3つが「決まり事」であることを覚えてもらうために取り入れたアクティビティだ。生徒たちは当初、恥ずかしそうにしていたものの、すぐに楽しんで取り組むようになり、翌週の授業で振り返りとして「3つの決まり事」を確認すると、生徒たちはジェスチャーを頼りに思い出すことができるのだった。



❶高倉式コンポストの授業で行ったジェスチャーゲームの教材。上から「空気」「水分」「食べ物」を表している　❷ごみの分別について教える授業のために松下さんが作成した教材。各種のごみを表すカードを、「有機ごみ」などのカテゴリーに分けていく　❸松下さんから授業を受けた中等学校の環境クラブのメンバーが、学んだことを他の生徒に伝える授業を行う様子

中等学校で高倉式コンポストの授業を行う松下さん

任地ひとロメモ
〈サン・マルティン郡タラポト市〉

内陸のアマゾン地域に位置する人口約14万人のタラポト市の市街地

右：アマゾン水系にある滝は重要な観光資源となっている
左：タラポト市はカカオの名産地。写真は地元産カカオを使ったチョコレート製品を売る店

特集

“任期序盤”の過ごし方

「現地のことを知る」「現地の人との関係を築く」など、その後の活動の基盤づくりを行う任期序盤。「ああしておけば良かった」と後悔しないために、任期序盤に念頭に置いておいたほうが良いことは何か？　事例を通して要点をピックアップする。

頼まれた業務をすべて引き受け 同僚たちの信頼を獲得

総合病院に配属され、理学療法の質向上に取り組んだ酒井さん。
着任初日、前任隊員と比較されて自信を失いかけたが、
「教わろう」という姿勢で同僚たちとの関係づくりに努め、活路を見出していった。

酒井さんが配属されたのは、病床数が約140床という総合病院の理学療法科。着任当時、外来患者と入院患者を合わせて1日に10～20人が同科でリハビリを受けていた。多かったのは、バスやバイクでの事故や、ココナツの木からの落下で骨折した患者だ。所属していた理学療法士は7人。カウンターパート（以下、CP）となった科長を含めて2人がベテランで、残りの5人は実務経験がまだ1年未満という若手だった。いずれもインドネシアで理学療法の教育を受けていたが、施術は「マッサージ」と「物理療法」が中心で、日本の理学療法で重視されている「運動療法」は行われていなかった。そのため、痛みは一時的に和らぐものの、回復はおぼつかないという状態だった。そうしたなかで酒井さんがメインの活動として取り組んだのは、同僚たちに運動療法の技術を伝えることだった。

「教える」ではなく「教わる」

「任期中でもっともつらい日だった」と酒井さんが振り返るのは、初出勤の日だ。理学療法士としての4年間の実務経験があった酒井さんは、「知識や技術を教えるのだ」と意気込んで赴任。ところが初日、同僚たちから聞かされたのは「現地語が流暢で、何でもできる人だった」という前任の理学療法士隊員を賞賛する話だった。「ところで、あなたは現地語が話せないの？」。そう尋ねられた酒井さんは、現地語がまだほとんど話せなかったことから自信を喪失。しかし、この日の悔しさが、その後の活動の原動力となった。

「前任隊員ができなかったことを、1つでも多く成し遂げて任期を終えよう」。気持ちを切り替えた酒井さんは、当面の活動方針を検討。現地語がまだ十分に話せないうちは、何かを「教える」どころではないことから、まずは同僚たちの仕事を「教わる」ことに徹しようと決めた。

「教わる」ために酒井さんは、担当となった患者の治療に携わるかたわら、たとえ理学療法に関係ないことであっても、頼まれた作業はすべて引き受けるようにした。例えば、ギプスの製作は若手スタッフが担当医師の補助をしていたが、そうした手間暇がかかる作業も厭わず手伝った。ギプスづくりは経験がなく、学ぶチャンスだと思ったからだ。また、CPから患者の情報について月ごとの集計を出す事務作業を振られたが、それについても酒井さんは患者について良く知る機会だと考え、拒否しなかった。やがてCPから、「肩が凝っているので揉んでほしい」などと業務外のことも依頼されるようになったが、酒井さんは「自分のマッサージの技術を直に感じてもらえる良い機会だ」と考え、引き受けた。

このような過ごし方が実を結び始めたのは、着任して半年ほど経ったころからだ。それまで酒井さんは同僚たちと同じ部屋で、患者に対して運動療法を中心とする治療を行っていたが、それを同僚たちに勧めることはしていなかった。そうしたなか、同僚たちが「運動療法もやっておいたほうが良いだろうか？」と尋ねてくれるようになったのだ。「教えるチャンスがやってきた」と感じた酒井さんは、易しいエクササイズのやり方などを伝授。すると彼らは、患者に自発的にそれらを教えるようになった。

従来、同僚たちは患者に対して「次は来られるときに来て」などと、その後の治療スケジュールについてあいまいな指導をしていた。それにより、まだ治療の継続が必要な患者が通院を止めてしまうケースが見られた。酒井さんは「教えるチャンスがやってきた」と感じた後、同僚たちに、「週に3回は通院するように」などと具体的な数値で患者にアドバイスすることを提案。すると同僚たちはそれを実践し、理学療法科が治療する患者の総数が、月の平均で3割程度増えるという変化があった。

徒歩通勤に変更

酒井さんが任期序盤に心掛け、その後の活動につながったことがほかにもいくつかあった。その1つは「任地ではなるべく徒歩で移動する」というものだ。着任した当時、任地にはほかにも日本人が住んでおり、酒井さんは当初、週末は彼らと過ごすことが多かった。3カ月ほど経って任地にいた日本人たちが帰国。そこではたと、「プライベートで現地の人たちと過ごす時間が少ないため、地域についての知識が欠けている」と気づいた。酒井さんには配属先以外でも地域のためになる活動に取り組みたいとの思いがあり、それには地域についての知識が不可欠だった。そこで酒井さんは、手始めに通勤手段を乗合バスから徒歩に変更。現地の人でも歩きたがらないような急な坂道を含む片道30分くらいの通勤路だった。厭わず徒歩通勤を続けたところ、やがて見ず知らずの住民から「あなたは昨日、あそこを歩いていたね」「あなたは病院で働いているらしいね」などと声を掛けられることが増えてきた。

あるとき、徒歩で通勤する酒井さんに1台の車がクラクションを鳴らしながら近づいてきて、運転している現地の人が「病院で働いている日本人よね」と声を掛けてきた。高齢者の入所施設で働いている人で、「施設で運動の指導をしてほしいと思っていた」とのことだった。そうして酒井さんはその施設でプラスアルファの活動として定期的に利用者への運動指導をすることが叶ったのだった。C

❶高齢者入所施設で肩こり予防の体操の指導を行う酒井さん
❷配属先で若手の理学療法士と共に運動療法を行う酒井さん

酒井さんの
ひとことアドバイス

「前任隊員」という重荷

前任隊員が活発に活動した人である場合、後任隊員は当初比較され、「語学力が低い」などと評価されてしまいがちだと思います。これから赴任される方はぜひ、そうしたプレッシャーにめげず、粘り強く同僚たちからの信頼獲得に努めてください。

CASE 1
時間を共有

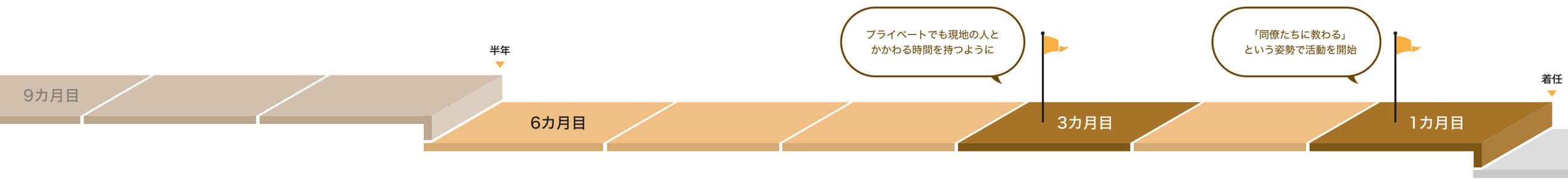
酒井実希（さかいみき）さんの事例
（東ティモール・理学療法士・2018年度1次隊）

PROFILE

1991年生まれ、東京都出身。大学卒業後、理学療法士として総合病院に4年間勤務。2018年7月、青年海外協力隊員として東ティモールに赴任。20年3月に一時帰国し、同年7月に任期を終了。

協力隊活動

バウカウ県病院に配属され、主に以下の活動に従事。
●同僚への理学療法に関する知識と技術の伝達
●地域における障害者の支援



可能な取り組みから着手し後の基盤づくりをする

14の村を管轄する行政機関に配属された小寺さん。村を巡回して活動を行うはずだったが、車が故障中でそれが不可能だったなか、徒歩圏内の家庭を訪問し、活動の端緒を探っていった。

CASE 2 思いを伝える

小寺麻里菜（こでらまりな）さんの事例
（パナマ・コミュニティ開発・2018年度1次隊）

PROFILE

1988年生まれ、群馬県出身。大学卒業後、地方公共団体に行政職で7年間勤務。2018年6月、青年海外協力隊員としてパナマに赴任（現職参加）。20年3月に帰国し、復職。

協力隊活動

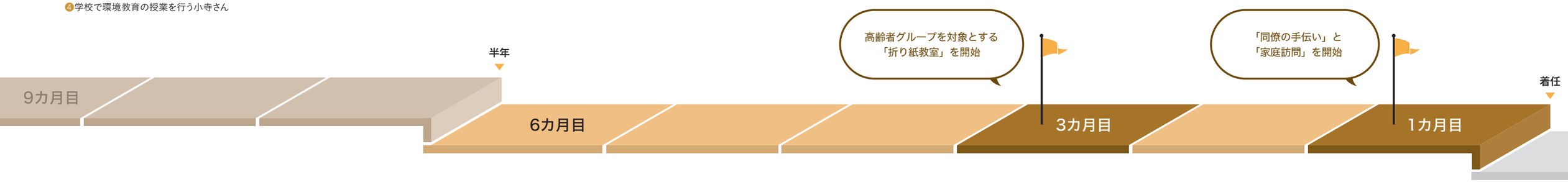
パナマ環境省持続的環境開発センターのエル・カカオ支所（西パナマ県カピラ市）に配属され、主に以下の活動に従事。
- 学校や地域での環境教育ワークショップの実施
- 生活習慣改善指導の実施
- 子どもたちへのキャリア支援

小寺さんの
ひとことアドバイス

軸足は配属先に

配属先の予算などの都合で、求められている活動に着手できない場合、配属先以外で活動のパートナーを見つけるのも打開策の1つですが、後に同僚たちから協力を得るためにも、配属先との接点を持ち続けることは重要だと思います。

❶高齢者グループを対象に折り紙教室を行う小寺さん
❷高齢者グループの折り紙教室の受講者
❸名刺代わりに配布した折り紙
❹学校で環境教育の授業を行う小寺さん



小寺さんが配属されたのは、パナマ環境省持続的環境開発センターの地方支所。環境に配慮した形で地域が発展することを支援する機関で、有機農業やコンポストづくり、森林保全などに関する指導を住民に対して行っていた。配属されていたオフィサーは、支所長を含めて2人。小寺さんのカウンターパート（以下、CP）となったのは支所長ではない方のオフィサーで、農業分野の専門性を持ち、20年以上勤務してきた男性だった。配属先には8年ほど前に協力隊員が派遣されたことがあり、その際、共に活動したのもCPだった。小寺さんのメインの活動となったのは、配属先が管轄する村で、住民を対象に環境教育のワークショップを行うことだった。

現状で可能な取り組みから着手

配属先が管轄する地域には14の村が存在していた。それらをCPと共に巡回して活動を行うはずだったが、着任当時、配属先の車は故障。各村までの道は未舗装で、雨期は水かさがドアまで達する箇所も走らなければならず、故障は日常茶飯事とのことだった。村はいずれも配属先から離れており、徒歩で赴くのは難しかったため、小寺さんはたびたびCPに車の修理状況を尋ねたものの、いつまで経っても返ってくるのは「今、修理している最中だ」との返事ばかりだった。気になって同期隊員のSNSを覗くと、少しずつ活動が始まっている様子がわかり、小寺さんの焦りは募っていった。

いつになるかわからない状況の好転をただ待っているだけでは仕方がない、現状でできることを実践していこう――。そう考えて小寺さんが動き出したのは、着任の約1カ月後だ。午前中は、CPが行うコンポストづくり指導のための資料づくりや、用務員が行う配属先の庭の整備などを手伝い、午後は配属先から徒歩で行ける範囲にある町中の家庭を一軒ずつ訪問し、自己紹介を行うというルーティンをつくった。

必ず午前中は配属先にいることにしたのは、同僚たちとの関係づくりに不可欠だと考えたからだ。「最初のうちは、毎日配属先に行って、どんな話題でも構わないから同僚たちとコミュニケーションを取り、関係づくりに努めることが仕事なのだと思ったほうが良い」――先輩隊員からそんなアドバイスを受けていた。配属先で毎日「雑用」とも言えるような作業に取り組んだことは、CPなどとの関係づくりだけでなく、ほかの人たちとの関係づくりにもつながった。例えば、通勤で配属先の前を通る外部の人が、庭の整備をしている小寺さんに声を掛けてくれるようになり、後に地域で環境教育のワークショップを行った際に助っ人となってくれたりもした。

一方、家庭訪問をすることにしたのは、「地域に出れば何かのきっかけになるかもしれない」と考えたからである。Google マップに表示されない道が多くある地域だったため、自己紹介のために回る際は毎回、新たな方面をおよその見当で歩きながら、地図を自作していった。行くつもりの方面は必ず事前にCPに伝え、安全性の面で問題がないかどうかを確認した。

自己紹介で活用したのは「折り紙」だ。花を折って自分の名前を書き、訪問先に渡した。これが、住民との距離を縮めるきっかけとなった。子どもがいる家庭では「ほかのものも折って」とリクエストされ、初対面でも懐いてくれるようになった。着任して3カ月経ったころには、高齢者グループから「手指の運動になるから」と依頼を受け、公民館で週1回、折り紙教室を開催するようになった。さらにその受講者から孫へ、孫から校長へと小寺さんのことが伝わり、校長からの依頼で学校での折り紙教室を開く機会も与えられた。

CPに思いが伝わり、活動が進展

家庭訪問の取り組みは、その後の活動にとっていくつかの点で良いステップとなった。

その1つは、スペイン語を使ったコミュニケーションの訓練になったという点だ。折り紙教室を重ねたことで、大勢の人の前に立って話をすることに慣れたため、後にコミュニティの巡回が可能となり、環境教育のワークショップを始めたときも、当初から手こずらずに済んだ。

折り紙教室を開いた学校では、環境教育授業の継続的な開催が叶い、さらに学校との連携で子どものキャリア支援も実施できた。

家庭訪問の取り組みのもっとも大きな効果は、小寺さんに対するCPの信頼が厚くなった点だ。着任当初、スペイン語がまだ苦手な小寺さんが、あまり積極的に会話をしようとしないことをCPは不満に思っており、「もっとスペイン語で話そうとすべきだ。使わないと話せるようにならない」などと伝えてくることもあった。そうしたなか、単身で地域住民の中に飛び込んでいった小寺さんを頼もしく感じたようで、コミュニケーションを以前より積極的にとり、活動を二人三脚で進めてくれるようになった。後になってわかったことだが、CPはこの時期、配属先の本部に「車がなければ協力隊員が活動できない。何とかしてほしい」と掛け合い続けていた。その結果、本部にある車を2週間交代でシェアしてもらえることになった。小寺さんの着任から半年ほど経った時期である。以後、それまでの家庭訪問の取り組みをステップとするさまざまな活動を展開することができた。C

CASE 3
顔を売る

木村正樹（きむらまさき）さんの事例
（ベリーズ・環境教育・2017年度3次隊）

PROFILE

1992年生まれ、千葉県出身。大学卒業後、民間企業で貿易業務に従事。2018年1月、青年海外協力隊員としてベリーズに赴任。20年1月に帰国。現在は自動車部品メーカーに勤務。

協力隊活動

オレンジウォーク町役場（オレンジウォーク郡）に配属され、主に以下の活動に従事。
●学校を巡回しての環境教育授業の実施
●環境啓発イベントの開催（ごみ箱デザインコンテストやクリスマスツリーコンテストなど）

着任早々の失敗をもとに活動の妥当な方向性を獲得

学校での環境教育の活性化を求められて町役場に配属された木村さん。着任当初、先輩隊員の活動を参考に試みた活動が頓挫するなか、その失敗を通じて配属先の状況を察知。活動の妥当な方向性を見出すことができた。

木村さんが配属されたのは、ベリーズ北部に位置するオレンジウォーク町の役場。約20人の職員が働いていた。同役場では「誇りと愛着を育む教育活動」に力を入れており、その一貫として学校での環境教育を活性化させることが、木村さんのメインの活動となった。

着任早々のトライアル＆エラー

木村さんは配属先に派遣された4代目の環境教育隊員。1～3代目の協力隊員は主に学校での環境教育に取り組んできたことから、自身の活動もそれが中心となる心づもりで赴任した。先代までの協力隊員は単独で活動に取り組んでおり、着任時、学校での環境教育を担当している同僚はいなかった。

木村さんが学校で活動するためには、配属先から学校に対して教員免許状なしに活動することの許可を求めるレターを出してもらうことが必要だった。しかし、対応してくれるはずの同僚が多忙で、手続きが停滞。配属先からほかの活動を求められることもなかったため、最初の活動は木村さん自身で見つけ出さなければならない状況だった。

木村さんは活動のアイデアを学ぶため、先輩の環境教育隊員の活動現場を見学。先輩隊員が取り組んでいたのは、ごみの減量に関する啓発として、コンポストをつくり、それを使って育てた野菜などを販売することだった。木村さんは早速、配属先の敷地でコンポストづくりを開始。ところが、同僚たちはそのことにほとんど関心を示さなかった。コンポストづくりの知識を持つ1人の職員が木村さんの作業現場にやって来たが、助言をするばかりで、共に進めようとはしてくれなかった。同僚たちのそうした反応を見た木村さんは、たとえ上手くつくることができるようになっても、その活動をいずれかの同僚が引き継いでくれることはないだろうと判断し、コンポストづくりをストップした。

次に取り組むことにしたのは、「ガーデニング」である。配属先の敷地には何にも使われていない土地があったことから着想した活動である。そこに花や木を植えて美化を図り、それを目にする同僚や住民たちの環境に対する意識の向上につなげようと考えた。ところが、やはり同僚たちは一向に関心を示さない。そうしてコンポストづくりの場合と同様の理由で断念することを決めた。着任して1カ月半ほど経ったころだ。

着手した活動が立て続けに頓挫したことで、木村さんの落胆は大きかった。しかし、早々にトライアル＆エラーを経験したことで、より妥当な方向へと活動の舵を早めに切り直すことにつながった。同僚たちは協力隊員と協働することは望んでおらず、先代までの協力隊員と同様、木村さんにも単独で活動することを求めている――自身が置かれているそんな状況を察することができたからだ。学校で環境教育を行うにしても、現地の誰かがそれを引き継ぎ、協力隊員がいなくても継続されるような形で取り組みたいと考えた木村さんは、配属先以外で協働してくれる人を見つけようと決意。町を回ってまずは顔を売る「営業活動」に力を入れることにした。

現地について深く学ぶことが端緒に

回った先は、学校や図書館、文化施設など。訪問先では、そこの事業の概要などを尋ねつつ、自分がどのような目的でベリーズにやって来たかを紹介した。

その後の活動に特に大きな影響があった出会いは、着任の約2カ月後に初めて訪問した「ハウス・オブ・カルチャー」（以下、「ハウス」）と呼ばれる文化施設だ。ベリーズ政府は同種の施設を各地に置いており、その地方の文化を保全したり、対外的に発信したりすることを主な事業としていた。

その訪問がきっかけで、「ハウス」のスタッフが先住民のマヤ族が暮らすマヤ村で文化を記録する動画を撮る取材に同行させてもらうことができた。村ではガーデニングに熱心な女性たちが多く、「活動のネタになる」と感じた木村さんは以後、毎週末にマヤ村を訪問。育てている植物のことをはじめ、人との付き合い方や休日の過ごし方、食事など村の文化を教わった。一方、取材に同行していた「ハウス」の関係者のなかに、マヤ族ではないけれどもその文化に詳しい女性（以下、Aさん）がいたが、彼女は現地の文化を知ろうとする木村さんの姿勢を評価。以後、家に招いてはベリーズのことを教えてくれた。

マヤ村の女性やAさんから教わった現地の知識は、後の糧になった。最初に環境教育授業をする機会を与えられたのはマヤ村の学校だったが、現地の文化のディテールに触れる授業は受けが良く、評判が広まって他校でも継続的に実施できるようになった。

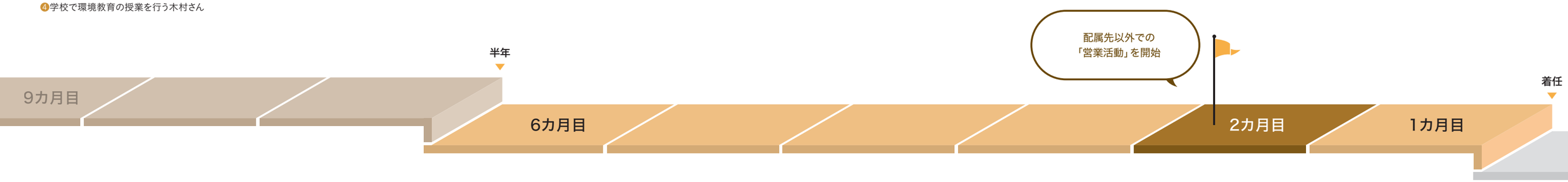
学校での環境教育授業については、結局最後まで担当者を確保することはできなかったが、教員への指導には力を注ぎ続けた。そして任期の終盤には、巡回先の学校による合同の環境啓発イベントが、各校の教員たちが主体となって2つ実現した。町に置くごみ箱のデザインと、ごみをリユースしてつくるクリスマスツリーのデザインを学校間で競うものだ。構想は木村さんが練ったが、運営は教員たちが担当。全国ネットの放送局や全国紙にも取り上げられ、配属先としても広報の点で無視できない反響だったことから、学校と共同でイベントの定着を目指しており、木村さんは帰国後もアドバイザーとして日本から参画している。

❶熱心にガーデニングを行うマヤ村の家庭で育てている植物について聞き取りを行う木村さん
❷学校対抗で開催した「ごみ箱デザインコンテスト」の参加者とその出品作品
❸学校対抗で開催した「クリスマスツリーデザインコンテスト」の参加者とその出品作品
❹学校で環境教育の授業を行う木村さん

木村さんの
ひとことアドバイス

トライアル＆エラーは早めに

着任早々、配属先のニーズも良くわからないままいくつかの活動を試み、ことごとく頓挫。しかし、その経験は配属先の状況を知る手立てとなりました。着任当初は、考えすぎずに何かを実行してみるというスタンスも有益かと思います。



CASE 4
課題の調査

馬場千穂（ばばちほ）さんの事例
（インド・日本語教育・2018年度1次隊）

PROFILE

1994年生まれ、兵庫県出身。大学在学中、国際交流基金アジアセンターの日本語パートナーズ派遣事業により、インドネシアで現地日本語教師のアシスタントを務める。大学卒業後の2018年7月、青年海外協力隊員としてインドに赴任。20年3月に一時帰国し、同年7月に任期を終了。

協力隊活動

スリ・ラマスワミー・メモリアル大学（タミル・ナドゥ州）の外国語学部に配属され、主に以下の活動に従事。
●日本語授業の実施
●インド人日本語教師の日本語能力・日本語指導力向上の支援

アンケート調査により現場の状況を客観的に把握

工科系大学に配属され、日本語授業の支援に取り組んだ馬場さん。赴任前に活動の具体的なイメージが湧かなかったなか、着任早々に同僚教員と学生へのアンケート調査を実施。そこで得た情報が後の活動のベースとなった。

馬場さんが配属されたのは、工科系大学の外国語学部。メインの活動となったのは、選択必修外国語の1つとなっていた日本語の授業を行うことと、同僚のインド人教員の日本語能力や日本語指導力の向上を支援することだった。着任当時、日本語を選択していたのは約1500人。約70人ずつのクラスに分かれて受ける必修の授業が各クラスに週2コマずつあり、それらを日本語教育の経験が豊富な6人の同僚教員と馬場さんで分担した。

同僚教員と学生へのアンケート調査

2018年度の始業と同時に着任した馬場さんは、直後から3クラスの授業を担当することとなった。馬場さんが同僚教員と学生を対象とする以下のような内容のアンケート調査を行ったのは、その約1カ月後だ。

【教員対象アンケートの主な質問項目】
■日本語能力のレベル
■日本語の学習歴
■担当している日本語授業の課題
■日本語教師としての今後のプラン
■家庭の状況

【学生対象アンケートの主な質問項目】
■日本語能力のレベル
■日本語の学習歴
■日本語を勉強する目的
■受けている日本語授業の満足度
■予定している進路

「アンケート調査を実施する」というアイデアは赴任前から持っていた。新卒での協力隊参加であり、どのように活動を進めるべきかについて具体的なイメージが湧かなかったため、その手がかりとなるような情報が欲しかったというのが、着想した理由の1つだ。

もう1つの理由は、大学時代の経験にある。国際交流基金の日本語パートナーズ派遣事業により約半年間、インドネシアの中等教育機関で現地日本語教師のアシスタントを務めた。その後、インドネシアの現地日本語教師を対象に、彼らがそれまで受けてきた教育が、彼らの授業のやり方にどのように影響しているかを明らかにする研究を行い、大学の卒業論文にまとめた。現地日本語教師へのインタビュー調査を含む研究だったが、それを通じて、「彼らのバックグラウンドを事前に把握していれば、アシスタントとしてもっと彼らに寄り添ったフォローができていたかもしれない」と感じていたのだ。

アンケート調査の実施にあたっては、作成した質問用紙を事前に同僚教員たちに見せ、意見を求めた。アンケートの目的は現状を把握することだったが、「自分の力量が評価される」と嫌がる同僚教員もいるだろうという懸念もあったからだ。学生対象のアンケートでは「受けている日本語授業の満足度」を尋ねる項目を設けていたが、同僚教員たちからは、「授業の満足度については『漢字』『文法』など単元ごとに細かく聞いてほしい」という意見があった一方、やはり「聞かないでほしい」という意見も出た。結局、「授業の満足度」については5段階評価の選択式と自由記述式の併用とし、集計時には5段階評価の結果は集計しないことにした。

アンケート結果をフィードバック

アンケート調査でわかったことは、日本への留学や日系企業への就職などを目指して日本語を選択したという学生が多く、そうした学生は学習意欲が高いことや、教員たちも指導力向上への意欲が高いことだ。

一方で、配属先で行われている日本語授業には課題があると認識している教員もいることがわかった。配属先の日本語授業で行われているのは、文法を覚えて母語に翻訳していく「文法訳読法」という教授法。それを前提とした教科書が採用されており、定期テストも文法や語句をどれだけ暗記しているかを確かめるものとなっていた。この教授法は、実際のコミュニケーション能力の向上にはつながりづらい。日本への留学や日系企業への就職を視野に日本語を学ぶ学生は、その点に物足りなさを感じており、教員のなかには、大学の方針で文法訳読法に終始せざるを得ないことに忸怩たる思いを持つ人もいた。

馬場さんはアンケート調査のこうした結果を、その後、さまざまな形で活動にフィードバックしていった。コミュニケーション能力を上げるために教科書から外れた授業を行えば、学生たちの定期テストの成績を下げることにつながってしまう。そこで馬場さんは、自分が行う授業では毎回導入部分を使い、その授業で学ぶことが日本で研究や仕事をする際にどのような場面で活用できるのかを説明して、日本語を使ったコミュニケーションの具体的なイメージを持ってもらうようにした。導入部分のそうした活用方法については、アンケート調査の直後から始めた教員たちとの週2回の勉強会でも提案した。

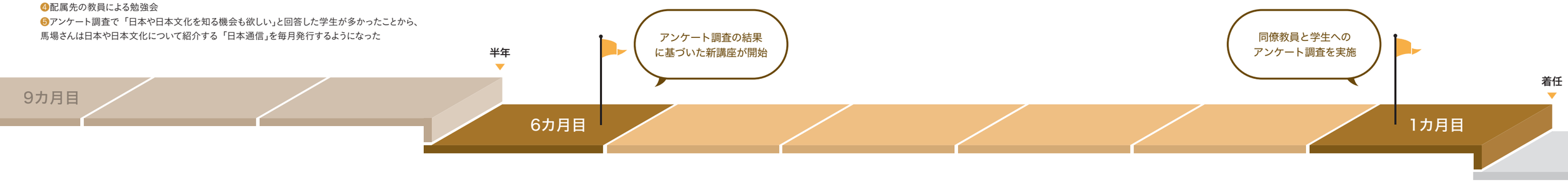
馬場さんはさらに、アンケート調査の結果を盛り込んだ企画書をつくり、日本語による実際のコミュニケーションで必要なスキルの獲得を目的とする講座の新設を上司に提案。国際交流基金がつくった教科書を使うもので、着任の半年後には国際交流基金との共催講座という形でそれが実現した。当初は馬場さんが講師を担当したが、任期の半ばに年度が変わってからは同僚教員とのチームティーチングに移行。受講した学生がスピーチコンテストで優秀な成績を収めるなどしたことから、大学側にもその意義が徐々に認められるようになったのだった。

❶担当していたクラスで授業を行う馬場さん
❷学生対象のアンケート調査の回答用紙
❸タミル・ナドゥ州の教員を対象に開催した研修会
❹配属先の教員による勉強会
❺アンケート調査で「日本や日本文化を知る機会も欲しい」と回答した学生が多かったことから、馬場さんは日本や日本文化について紹介する「日本通信」を毎月発行するようになった

馬場さんの
ひとことアドバイス

アンケート調査は同僚たちと

現地の人たちへのアンケート調査は、現地の状況や課題を把握し、活動計画策定につなげることができます。同僚たちと協力して行えば、より充実した内容になると思います。また、重ねて行えば、活動計画の見直しにもつなげられます。



協力隊員の持ち物を盗んだ児童に対し とっさに手を上げてしまった

話＝楠本（くすもと）薫（かおる）さん（南アフリカ共和国・小学校教育・2018年度1次隊）

各学年に約30人のクラスが1つずつある7年制の小学校に配属され、4～7年生の算数授業を担当した。4年生以上の学年は教科担任制がとられていた。

着任当時、5年生でも指を使わなければ1桁の足し算ができないなど、児童の学力の低さは驚くばかりだった。私は毎日補講を行い、児童の学力向上のために懸命に活動した。一方、遅刻や喧嘩、窃盗など素行の悪さも問題だった。南アフリカ共和国では、教育現場での体罰が法律で禁止されている。しかし現地の教員は、「素手はまずいが、木の枝を使えば問題にならない」と言い、実際に彼らはその方法で児童をしつけていた。過去に協力隊員が児童に体罰をし、問題になったことがあるという話を赴任直後に聞いていたことから、私は木の枝を使う体罰でさえ行わないと決めていた。授業や補講を重ねて児童たちとの関係が出来てくると、大きな声で叱るようになったが、それで児童に反発されるということはなく、彼らの素行は徐々に良くなっていった。

着任して1年ほど経ったころ、素行が際立って悪い5年生の男子児童（以下、A君）が配属先に転校してきた。他の児童との喧嘩が絶えず、私を含めて教員たちはA君に手を焼いた。

転校の1カ月後、私が用意していたご褒美のシールをA君が盗んだ。教え子に私物を盗まれるのは、それが初めてだった。ほかの児童から事情を知らされ、実際にA君のポケットからシールが出てきたため、「謝りなさい」と言った。しかしA君が無言で睨みつけてきたことから、私は思わず平手で顔をはたいてしまった。A君は驚き、走って下校。私は我に帰り、すぐにその件を校長に報告した。

その翌日、A君の母親が学校にやって来て、校長に「訴える」と告げた。校長は、私が毎日補講をするなど、児童の学力向上のために熱心に活動しているのを理解してくれていたため、「君にはここで活動を続けてほしい。だからこそ、こういう問題を起こすのはやめてほしい」と言ってくれた。任地変更せざるを得なくなることも覚悟したが、結局、訴えられることのないまま、A君はまた転校していった。

任期終盤になり、算数を教えてきた児童たちがようやく四則計算をこなせるまでになった。そのような変化をもたらした活動だっただけに、志半ばで任地変更にもなりかねなかったA君の一件は、大きな失敗だったと思う。 C

楠本さんが担当した小学5年生のクラスの算数授業

PROFILE

1995年生まれ、埼玉県出身。早稲田大学教育学部を卒業後、2018年7月に青年海外協力隊員として南アフリカ共和国に赴任。20年7月に帰国。

活動概要

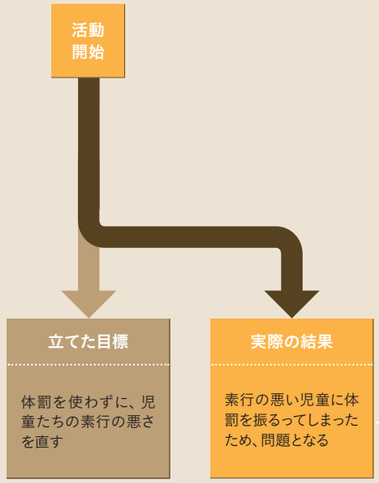
地方農村部の小学校に配属され、主に以下の活動に従事。

●小学校4～7年生の算数・英語・生活科の授業の実施

●日本の小学校との間のビデオ交流の開催

“失敗”から学ぶ #192

事例整理



【本事例の状況（SWOT分析）】

	促進要因	阻害要因
内部	【隊員側の強み（S）】毎日補講をするなど、活動への意欲が高かった	【隊員側の弱み（W）】派遣前に教職を務めた経験がなかった
外部	【活動環境の強み（O）】隊員の活動姿勢に対する校長の理解があった	【活動環境の弱み（T）】現地教員も手を焼くほど児童の素行が悪かった

隊員自身の振り返り

協力隊員が過去に児童に体罰をし、問題になったことがあるという話を聞いていたにもかかわらず、それをしてしまったA君の件は、さまざまな要因が重なったからだと思います。最大の要因だと思うのは、私の教員としての力不足です。教職の経験がないまま協力隊に参加したため、子どもたちへの接し方の引き出しが少なかったと思います。「教師の自分に悪さをする」「教師の自分を脱みつける」といった行動をとる子どもはA君が初めてであり、こちらも混乱してとっさの行動に出てしまいました。「ひと呼吸置いて冷静になり、相手の話を聞く」などの対応が適切だったのではないかと思います。

他隊員の分析

児童の幸せのために何ができるかを考える

児童の学力向上のために毎日補講を行うなど、熱心に活動されたことはわかりました。私は日本で教職を経験してから協力隊に参加しましたが、教育の現場で大切なことは、児童のバックグラウンドを見つめ、児童の幸せのために何ができるのかを考えて接することであり、これは国や言語、文化に関係なく大切にすべきことだと、私自身の経験から実感しています。絶えず児童たちの幸せのために何ができるかを考えようと心がけていれば、本事例のように児童が意表を突く行動をとったときでも、ひと呼吸置いて「この子の幸せのために、自分はどういう対応をすべきか」を考えることができるのではないかと思います。

文＝協力隊経験者

●大洋州・理科教育・2017年度派遣

●活動概要：中等学校に配属され、理科と数学の授業を実施。

行動を起こした背景に目を向ける

私の配属先は病院でした。病院の栄養補助食品を何度も不正に持ち出そうとする同僚がおり、それを止めようとする私を彼女が罵ってきたときに、思わず手を出してしまったことがあります。思い返して反省したのは、「なぜ同僚がそのような行動を起こすのか？」をまずは考えるべきだったということです。後にほかの同僚から、生活が苦しい家庭なのだと聞きました。感情的になることは必ずしも悪いことではなく、物事に一生懸命に取り組んでいれば仕方のないことだとも思います。本事例では、A君ともう少し向き合い、彼の行動の背景を理解してあげることができれば良かったのではないでしょうか。

文＝協力隊経験者

●アフリカ・栄養士・2016年度派遣

●活動概要：県病院に配属され、栄養失調児の母親への栄養講習や地域住民を対象とした料理教室を実施

派遣人数は少ないものの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

希少職種図鑑

#A211

金融

派遣中 ▶ 0人
累計 ▶ 46人
分類 ▶ 計画・行政
活動例 ▶ 大学などでの講師、金融機関への助言
類似職種 ▶ 行政サービス、マーケティング

※人数は2021年5月末現在。

経澤さん（最前列）が指導した大学生たちと

PROFILE

1954年生まれ、東京都出身。成蹊大学経済学部を卒業後、米・アリゾナ州立大学サンダーバード国際経営大学院の国際経営学修士課程を修了。その後、外資系の銀行と証券会社で信用リスク管理に関する業務に従事。定年退職後の2017年3月、シニア海外協力隊員としてウズベキスタンに赴任。19年3月に帰国。

活動概要

世界経済外交大学（タシケント州タシケント市）に配属され、主に以下の活動に従事。

- ●国際金融市場論の授業の実施
- ●国際マーケティングや信用リスク管理について教える補習ゼミの実施
- ●証券市場の開発を行う政府機関へのアドバイス

話

経澤伸一郎（きょうざわしんいちろう）さん
（シニア海外協力隊員／ウズベキスタン・2016年度4次隊）

Q メインの活動は？

ウズベキスタンでは1991年にソ連から独立して以来、国営企業の民営化、外国為替の自由化、海外からの投資の促進など、市場経済への移行が徐々に進められています。そうしたなか、私が配属された世界経済外交大学の国際経済学部では、市場経済化に対応できる人材の育成を目的に、国際経済や国際金融に関する教育を行っています。私は教員として、主に「国際金融市場」に関する講義やゼミを担当しました。また、外資系の銀行や証券会社に勤務するなかで得た知識をベースに、補習ゼミの形で「信用リスク管理」や「国際マーケティング」などについても教えました。学外では、証券市場の開発に携わる政府機関に対して、日本の金融・証券に関する法律を紹介するなどの支援をしました。

Q 活動での最大の困難は？

大学側が突然物事を決定したり、新たな活動を要望したりすることが多かった点です。例えば、担当する授業の数の倍増を新学期が始まる直前に打診されたり、決まっていた時間割が急に変更されたりすることなどがありました。同僚教員や学生たちも対応のしづらさを感じているようでしたが、大学はトップダウン型の管理体制だったため、仕方なくそうした状況を受け入れているようでした。

Q どう対応しましたか？

唐突な要望を一度引き受けてしまうと、次から次へと要望される傾向があったことから、「授業の準備には時間をかけたい」といった私の考えを、日頃から上層部に繰り返し話しておくよう努めました。それにより、限度を超えた要望について断るのが容易になったと感じました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

「金融」という職種で協力隊に参加されるのは、シニア世代の方が中心かと思います。シニア世代の協力隊員全般に共通することだと思いますが、「寛容の精神」を忘れないことが活動では重要だと思います。G7諸国のなかでも、日本は計画性や時間の正確さを特に重んじる国だと思います。そうした社会で長い間仕事をしてきたことから、派遣国では想定外のことがあまりに多いため、当初は強いフラストレーションを感じてしまうはずです。そうした状況を乗り切るためには、憤りを募らせてばかりいるのではなく、「郷に入れば郷に従え」という姿勢で対応するのが良いと、私は自分の活動を通して実感しました。そうした姿勢で数カ月間過ごしていると、次第に現地のペースに慣れていき、それ以後は落ち着いた気持ちで充実した時間を過ごせることと思います。

#G123

ソフトボール

派遣中 ▶ 0人
累計 ▶ 129人
分類 ▶ 人的資源
活動例 ▶ ソフトボールの普及、選手の育成・強化、指導者の育成
類似職種 ▶ 野球

※人数は2021年5月末現在。

中村さん（前列中央）がたびたび指導に訪れたクラブチームの選手たちと

PROFILE

1979年生まれ、千葉県出身。中学生のときにソフトボールを始め、大学卒業後はオーストラリアでのワーキングホリデーなどを挟みながら2つの実業団チームで選手として活躍。トレーニングジムのインストラクターを経て、2017年1月に青年海外協力隊員としてボツワナに赴任。19年7月に帰国。

活動概要

ボツワナソフトボール連盟（ハボロネ市）に配属され、ソフトボールに関する主に以下の活動に従事。

- ●ボツワナ代表チーム（男女）の指導
- ●国内各地のクラブチームや学校に赴いての指導
- ●ボツワナ代表チームが使うグラウンドの整備体制の強化支援

話

中村藍子（なかむらあいこ）さん
（ボツワナ・2016年度3次隊）

Q メインの活動は？

ソフトボールはボツワナではメジャーな競技で、各地にクラブチームが存在し、小学校のクラブ活動にも取り入れられています。そうしたなかで私の主な活動となったのは、男女のボツワナ代表チームをアシスタントコーチとして指導することと、各地のクラブチームや小学校に赴いて講習会を実施することです。男子代表チームは世界選手権大会で初めてベスト8入りを、女子代表チームは世界選手権大会本戦への初出場を果たしました。

Q 活動での最大の困難は？

継続して指導する代表チームの選手たちには、ゴミを拾ったりトンボがけをしたりといったグラウンド整備、道具を大切に扱うこと、時間の遵守など、プレー以外に選手として大切なことの実践を促そうとしました。ところが、現地の指導者ですらこれらには馴染みがなく、当初は声がけをしても指導者と選手のいずれからもほとんど反応がありませんでした。

Q どう対応しましたか？

グラウンドの整備については、私自身が率先して行い、それを見て真似てくれるのを待ちました。すると、自発的に実践する指導者や選手、選手に実践を促す指導者が現れるようになりました。

一方、時間の遵守については、最終的に実践を促すことは諦めました。現地では、家庭での役割を果たすために家庭外の仕事や活動に関する時間の約束を犠牲にするのは一般的です。そうした社会のなかで、ソフトボールに関して時間の遵守を促すのは出過ぎたことかもしれないと考えたからです。ただし、配属先の同僚は私の言わんとすることを理解して、指導者や選手に時間遵守の大切さを説いてくれたので、現地の人たちの間でこの問題についての議論がいずれ活発化することを願っています。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

競技経験を踏まえて重要だと思うアドバイスをしても、相手がそれを受け入れてくれないなど、スポーツ分野の職種で派遣される方々は皆、さまざまな壁に直面することと思います。そうした際の落ち込みは、赴任時に持っていたやる気が強ければ強いほど、大きいかもしれません。しかし、やる気はやはり活動の大切な源だと思います。理想と現実の差にいったんは戦意喪失したとしても、赴任時に抱いていたやる気を思い出して、現地の方々と出会った縁の貴重さをあらためて感じてください。そこからぜひ、自分に何ができるかをもう一度考え、立ち上がっていっていただきたいと思います。

JICA海外協力隊的プチテクガイド

簡単＆便利！ 活動・生活のパワーアップに役立つ

第117回

活動に役立つアイデア

ボッチャ入門③

ナビゲーター＝浅見明子さん
（ネパール・障害児・者支援・2017年度1次隊）

「練習」の方法

【現地の教員などが独力で進められる練習プランを】

特別支援学校などで新たなアクティビティとしてボッチャの導入を図る場合、理想的なのは、協力隊員が帰国した後も現地の教員たちによってプログラムが継続されることだと思います。私は数校の特別支援学校を週に1回ずつのペースで巡回し、ボッチャの普及に取り組みました。私が訪問しない日は教員たちで練習を進めるようお願いしたのですが、最初は彼らから「練習の進め方がわからない」との声が出ました。そこで私は、技術レベルを10段階で評価する「ボッチャ検定」を作成。各段階の評価項目とその指標をイラストで示した資料をつくって彼らに渡したところ、各段階を順にクリアさせていくような練習を独力で進めてもらえるようになりました。下の表は、私が作成したボッチャ検定の一部です。シンプルな内容ですが、対象者に合わせた練習メニューを作成するうえでの参考にしていただければと思います。

段階	評価項目	評価指標
1	転がすことができる距離	1メートル以上転がすことができるか
	狙うことができる方向	「正面方向」「右方向」「左方向」のいずれにも転がすことができるか
2	転がすことができる距離	2メートル以上転がすことができるか
	狙うことができる方向	2メートル程先に横に並べた6個の球のいずれかに当てることができるか
3	転がすことができる距離	5メートル以上転がすことができるか
	狙うことができる方向	2メートル程先に横に並べた3個の球のいずれかに当てることができるか

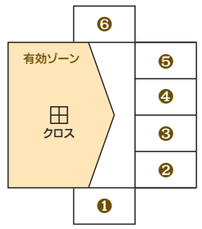
【身体障害がある人への指導】

身体障害がある人にボッチャの指導する場合、「肘の角度はこれくらいにする」など、体の動かし方について細かな指示をしないよう心がけてください。体の各部位の可動状態は1人1人異なるため、どのように体を動かせば球をうまく転がすことができるかも1人1人異なるからです。身体障害がある人に転がし方を指導する際は、「転がしたい方向をしっかり目で見て転がす」など、体の状態にかかわらず重要な点だけを伝え、それをベースに各自に合った転がし方を探ってもらうのが良いと思います。

「試合」の方法

スポーツの醍醐味はやはり「試合」にあります。私の巡回先の子どもたちも、試合となると俄然熱が入るため、訪問時には毎回、練習の後に試合を行うようにしていました。その際、ルールを公式のものから以下のようにアレンジすることで、より多くの子どもが参加し、楽しめるような試合になりました。公式ルールは前々回の記事（2021年5月号P.22）でご確認ください。なお、「試合」についても、協力隊員が帰国した後に現地の教員などで実施を継続してもらうことが理想ですが、そのために不可欠なのは、彼らに「審判」ができるだけのルールの知識を持ってもらうことです。私は丸一日の審判講習会を開催しました。ネパールボッチャ協会から受講者に「認定証」を授与してもらうことにしたところ、特別支援学校などの教員約50人に受講してもらえました。

▶公式ルールのコートでは、球をおおむね5メートル以上転がすことができる人でなければ、自球を的球に近づけることは困難です。そこまでの力がない人が参加する試合では、コートをアレンジして自球を的球に当てやすくするのも手です。右図はその一例です。



全体のサイズは出場選手の力量に応じて調整する

▶公式ルールでは競技クラスが4つに分けられ、試合に参加する選手の障害の度合いをある程度合わせます。しかし、障害の度合いに差がある人同士や障害者と健常者の試合を設定すれば、多様な人たちが交流する機会の創出にもなります。レクリエーションゲームとして競技レベルに差がある人たちが参加する試合をする際は、よりうまく球を転がすことができる人に「ハンディ」を付けるのも有効です。「コントロールが難しい『ラグビーボール』などを自球に混ぜる」などがその方法の例です。

▶公式ルールの団体戦は「3人対3人・6エンド制」ですが、人数の制限を取り払えば、たとえ1人がプレーする回数が少なくなっても、より多くの人が「自分事」としてかかわれる試合とすることができます。

投稿募集！

活動や生活に役立つちょっとしたテクニックをお持ちの方は、『クロスロード』編集室まで。
crossroads@sojocv.or.jp

生活に役立つ技

デンタルケアの基本

ナビゲーター＝織田千恵さん
（サモア・歯科衛生士・2016年度1次隊）

私の配属先だった病院歯科に多くの協力隊員がむし歯治療で来院したほか、他国の協力隊員から歯のトラブルについて相談を受けることもありました。協力隊員の派遣国は医療環境が日本と異なるため、現地で治療ができずに帰国せざるを得ないケースもあります。そこで、歯科でのトラブルを回避するためのポイントを6つご紹介します。

【POINT❶】派遣前にかかりつけの歯科医院を受診しよう！

これから派遣されるという方は、かかりつけの歯科医院を受診して口の中の状況を把握し、必要な治療を済ませておきましょう。派遣前に無理をして短期間で親知らずの抜歯をしたため、体調が悪化してしまったという隊員もいました。訓練開始や出国の直前は大変忙しいため、派遣前訓練に入る前に時間の余裕を持って受診し、要治療である場合は、訓練開始日や出国日、派遣期間などを歯科医に伝えると良いでしょう。

【POINT❷】お気に入りの歯ブラシを派遣国に持参しよう！

私の派遣国で入手できる歯ブラシは大きすぎ、使いづらかったです。同様の国は多いと思いますので、毎月新しいものに交換できるだけの本数を赴任時に持参することをお勧めします。日本では多種の歯ブラシが手に入りますが、お勧めは表のようなタイプです。毛先の形状には丸みがある「ラウンドタイプ」と、先端に向かって細くなる「テーパードタイプ」がありますが、後述のように前者はむし歯予防の、後者は歯周病予防の歯磨きに向いています。

項目		お勧めタイプ
持ち手の形状		ストレート
毛	素材	ナイロン
	硬さ	柔らかめ～普通
	歯に当たる面の形状	フラット（平ら）

【POINT❸】2つの歯磨き方法を駆使しよう！

歯ブラシはペンと同じように持ち、毛先がしならない程度の力で磨きます。むし歯と歯周病はそれぞれ予防に効果的な磨き方が異なります。むし歯予防に向いているのはラウンドタイプの歯ブラシで、「奥歯の溝」「歯の表面」「歯の裏面」に毛先を直角に当て、小刻みに往復させます（写真Aと写真B）。歯周病予防に向いているのはテーパードタイプの歯ブラシで、歯と歯ぐきの境に毛を45度に当て、微振動させます（写真C）。

【POINT❹】3つのプラークゾーンはここだ！

むし歯と歯周病の主な原因はプラーク（歯垢）ですが、うがいでは除去できず、歯磨き以外に除去の方法はありません。プラークが付きやすいのは「奥歯の溝」「歯と歯ぐきの境」「歯間」の3カ所です（写真）。歯間のプラークは歯ブラシだけでは除去できません。歯間が空いていない方はデンタルフロスや糸付ようじで、空いている方は歯間ブラシでプラークを除去してください。これらも協力隊員の派遣国では入手が困難であるため、赴任時に持参しましょう。

【POINT❺】フッ化物配合歯磨剤を効果的に使用しよう！

フッ化物配合歯磨剤はむし歯予防に効果があります。フッ化物配合歯磨剤（濃度は1000～1450ppm）での歯磨きを毎日行ってください。磨いた後のうがいは1回だけにし、その後1～2時間は飲食を控えることで、フッ化物が歯に定着します。フッ化物配合歯磨剤もやはり協力隊員の派遣国では入手が困難であるため、赴任時に持参しましょう。

【POINT❻】痛くなったら応急処置！

最後に、痛みに対する応急処置の方法をご紹介します。「歯が痛い」という場合は、「冷やす」「鎮痛剤を服用する」の2通りです。正露丸を詰める方法は、病状によっては痛みを増大させることもあります。「歯ぐきが痛い」という場合は、うがい薬の原液を歯ブラシに数滴たらし、優しくマッサージするように当該箇所を磨きます。塩でも代用可能で、お勧めはイソジンです。

JICA Volunteers'
before ▸ after 人生を変えた2年間

before
複合機メーカーの社員

↓

after
吉本興業所属の芸人

NSC時代に漫才コンビ「ふらんこ」として舞台に立つ石川さん

「笑い」で世界を平和に

セネガル・村落開発普及員・2013年度1次隊
石川 洸（こう）さん

人を笑わせる技術は、教職に就いたときに役立つかもしれない――。そんな理由で学生時代から「笑い」の修行をしたいと考えていた石川さんは、協力隊に参加した後、それを実行。吉本興業所属の芸人となった。

経験を広げるために

英語科教員になるために関西外国語大学に進学した石川さんが、「教員になる人間はさまざまな経験を積んでおくべき」と考えて米国に留学したのは、3年生のとき。異文化に触れる楽しさを知った石川さんは、次は途上国での暮らしを経験したいと、協力隊参加を考えるようになった。

卒業時、いずれは教員になろうと考えていたが、その前にもっと経験の幅を広げておきたいと、教員以外の進路を検討した。その1つは企業への就職。専門技術を持っていなかったため、協力隊参加に向けて3年間くらいは社会人経験を積んでおいたほうが良いだろうとの考えがあった。検討したもう1つの進路は、吉本総合芸能学院（NSC）への入学だ。吉本興業が運営するタレント養成機関である。新潟で生まれ育った石川さんが大阪の大学に進学して驚いたのは、大阪では日常のコミュニケーションがボケとツッコミに溢れ、「笑い」が人々の重要な潤滑油となっていることだった。石川さんはそれをなかなか真似ることができなかった。NSCへの入学を検討したのは、コミュニケーションに「笑い」を取り入れる力を得れば、教員となったときに教え子たちとの関係づくりに役立つだろうと考えたからだ。

新卒のタイミングを外すと難しくなると思い、最終的には企業への就職を選択。就職先は複合機メーカーで、英語力があったことから、日系企業の海外進出を支援する業務などを任された。

協力隊に参加したのは、社会人となって5年目のこと。英語以外の言語を身につけたかったことから、フランス語圏への派遣を志望。セネガルに派遣されることとなった。配属先は、砂漠化の防止が課題となっていたルーガ州リンゲール県の森林局。植林活動の支援や、消費する薪が少なくて済む改良かまどの普及などに取り組んだ。

任期を終えた後、日本の食品メーカーの誘いを受け、セネガルの駐在員として現地法人の立ち上げに参画した。その任務がひと段落したことから退職し、日本に帰国したのは2019年3月。33歳になっていた。

[石川さんのプロフィール]

before
- 1985 新潟県出身
- 2009 3月、関西外国語大学外国語学部英米語学科を卒業
- 4月、複合機メーカーに入社

JICA Volunteer
- 2013 **7月、青年海外協力隊員としてセネガルに赴任**
- 2015 7月、帰国

after
- 2017 4月、日本の食品メーカーにセネガルの駐在員として就職
- 2019 **4月、吉本総合芸能学院に入学**
- 2020 5月、芸人「Ko」として吉本興業に所属

教職に就いたときに幅広い経験が役立つだろうと考え、協力隊に参加。

芸人の道に進むなら年齢的にも今が最後のチャンスだと考え、入学を決意。

お笑い輸出課プロジェクト

開　　始：2019年
参加メンバー：フランボネ（コンビ）
藤田ゆみ
Ko（石川さん）
※いずれも吉本興業所属
活動内容：以下のようなワークショップを学校などで実施
「漫才で学ぶ日本語」
「漫才で学ぶ英語」
「漫才で学ぶフランス語」
「漫才で学ぶスペイン語」
「漫才で学ぶ防災」
「漫才で学ぶSDGs」

「漫才で学ぶ日本語」

次の進路に選んだのはNSCへの入学だ。カリキュラムは1年間。漫才などの技術を学びつつ、ライブで舞台経験を踏ませてもらえる。石川さんは同期の受講生と漫才コンビを組んだ。ギャシャール・シルバーさんというフランス人で、コンビ名は「ふらんこ」。SNSで日本のお笑いにはまり、芸人になるために日本に来たという人だった。ネタの路線は、日本で暮らし始めたフランス人と日本人の異文化衝突。入学の3カ月後、プロを含め5000人以上が参加する漫才のコンテスト「M-1グランプリ」で、1、2割しか残らない1次予選を突破することもできた。

20年5月にNSCを修了すると、2人は吉本興業所属のプロの芸人となることができた。石川さんの芸名は「Ko（こう）」。「ふらんこ」としての活動を続けるつもりだったが、コロナ禍の影響で頓挫。ライブがストップし、シルバーさんは副業が見つからないため、帰国せざるを得なくなったからだ。

協力隊時代に改良かまどの製作を手伝った任地の住民と

転機が訪れたのは、20年の後半に入ってから。「漫才づくり」を通して外国人に日本語を学んでもらう「お笑い輸出課プロジェクト」と称した取り組みに参加することになった。吉本興業所属の漫才コンビが始めたもので、現在はそのコンビと石川さんのほかにもう1人、吉本興業所属の芸人が参加している。みな、何らかの外国語が得意な芸人たちだ。

プロジェクトの中身は、大学などで留学生を対象に1時間ほどのワークショップを開くこと。石川さんたちが漫才のネタのつくり方を解説した後、受講者同士でコンビを組み、日本語の短い漫才をつくってもらう。現在はすべてオンラインで実施。受講者に日本語を教える教員たちからは、「通常の会話練習以上の効果がある」と好評で、日本各地の大学や専門学校などから、さらには海外の日本語教育機関からも実施の依頼がある。

ワークショップで石川さんが感じているのは、「笑いのポイント」は国によって違うが、「ボケとツッコミが掛け合いをする」という漫才の基本形は、どの国の笑いをも表現できる「受け皿」になるということだ。おいしい料理が人と人をつなぐのと同様、漫才という皿があれば「笑い」が伝わり、人と人をつなぐ。それは世界平和の実現の一端を担っていることにほかならないと、石川さんは考えている。

いずれ教職に就くのかどうかはまだ決めていないが、石川さんは「笑い」が持つ可能性の大きさを感じていることから、しばらくは芸人としての修行を積み、「笑い」を通じた社会貢献に取り組んでいきたいと考えている。C

帰国後よもやま話

第27回 日本語教育分野隊員篇

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、OB・OGに語り合ってもらいます。

［座談会参加者］

A さん（女性）

【派遣前】
日本語教師（大学など）
【協力隊】
▶退職参加
▶・日本語教育
・アジア
・2015年度派遣
▶大学で日本語の授業を担当
【現在】
日本語教師（留学生などが対象）

B さん（女性）

【派遣前】
一般企業社員
【協力隊】
▶退職参加
▶・日系日本語学校教師
・中南米
・2016年度派遣
▶日系人団体が運営する日本語学校で日本語教育などに従事
【現在】
日本語教師（オンライン授業）

C さん（女性）

【派遣前】
大学院生
【協力隊】
▶退職参加
▶・日本語教育
・大洋州
・2017年度派遣
▶教員養成校で日本語教師の養成に従事
【現在】
県国際交流協会の日本語教育担当職員

SNSの威力

A 大学時代に副専攻として日本語教育を学んだ後、日本語教師養成講座をオンラインで受けました。その後、日露青年交流センターの日本語教師派遣事業によりロシアで3年間、さらに日本の大学や日本語学校などで3年間、いずれも日本語教師として働いてから、協力隊に参加しました。配属先は大学で、主専攻として日本語を学ぶ学生を対象とする日本語授業を担当しました。任期を終えた後、まずはスペインの大学院で言語学の修士号を取りました。現在は、地方都市の自治体から委託を受け、アジアの国のIT人材を地元企業に取り込む目的のプログラムによる短期留学生やインターンへの日本語教育などに携わっています。コロナ禍のため、授業はすべてオンラインで行っています。

B 私は大学卒業後、一般企業に勤めながら日本語教師養成講座を受け、さらに日本語教育能力検定試験に合格しました。その後、国際交流基金アジアセンターの日本語パートナーズ派遣事業により、インドネシアで5カ月間、現地日本語教師のアシスタントを経験しました。協力隊では、比較的小規模な日系人団体が運営する日本語学校に配属され、日本語授業のその団体の行事の手伝いなどに取り組みました。派遣前からいずれは海外に住みたいと思っていたのですが、任地での生活が気に入ったため、帰国して4カ月後に定住するつもりで戻りました。現在は、米国の企業からオンラインの日本語授業の講師を請け負っています。

C 私は大学と大学院の修士課程で日本語教育学を学びました。その間、ドイツとタイの大学で1年間ずつ、実習という位置付けで日本語教育に携わっています。協力隊は大学院を修了した年に参加しました。配属されたのは教員養成校で、高校の日本語教師になることを目指す学生に日本語や日本語教授法を教えました。現在は県の国際交流協会の日本語教育担当職員として、日本語がほとんど話せないことで生活に困っている外国人住民の方々を対象とする無料の日本語教室の講師を務めたり、その運営を行ったりしています。

A 私はLinkedInに自分の経歴を英語で投稿しているのですが、英国や米国、ポルトガルなど各国の会社から言語に関する仕事の依頼がよく来ます。おそらく、日本語教師のキャリアがあることを英語を使ってSNSで発信している人が少ないからではないかと思います。Bさんは米国の企業からどのようにして仕事のチャンスを得たのでしょうか。

B インターネットで「日本語」「オンライン」といったワードで検索をかけ、求人情報を探すという地道な方法でした。それでもかなりの情報がヒットしました。

C 私はInstagramに自分の協力隊活動について日本語で情報を発信していたところ、派遣国と同じ大洋州の国の企業の方から、日本人留学生に対応する社員に日本語を教える仕事の依頼をSNSのダイレクトメッセージでいただきました。「ブログも拝見しています」とのことだったので、その地域の文化を知ったうえで日本語を教えることができる人材を見つけるためにSNSを活用されているようでした。

協力隊経験での気づき

A 私は派遣前、大学院に進学するつもりはありませんでした。しかし、派遣国では学歴で品定めされるため、修士号を持つ同僚の先生たちに見下されて悔しい思いをしたので、進学することにしました。研究内容は音声学ですが、これを選んだのも協力隊時代の経験がきっかけです。派遣国で行われるスピーチコンテストでは、内容が良いスピーチをしても発音が悪い人は上位に入賞できないという傾向にあることを感じました。それは理不尽だと思い、発音の悪さがスピーチの内容の評価にどう影響するかについて研究することにしました。

B 私の派遣国では、日本語の背景にある日本文化の継承も目的とする「継承日本語教育」が日系人子弟に対して行われています。協力隊時代にそれへの興味が高まり、さらにその後任地に戻って暮らし始めたため、興味はさらに高まりました。そこで私も大学院に進学し、研究対象にしてみたいと思っているのですが、Aさんはどのような理由でスペインの大学院を選ばれたのでしょうか。

A 一番の理由は、10カ月という短い期間で修士号が取れる大学院だったことです。私は前述のように、ぜひとも大学院に進学したかったというわけではなく、逆にできるだけ早く日本語教育の現場に戻りたいと思っていました。と言うのも、もともと現場が好きだということもありますが、協力隊時代に日本語教育に関する新たな気づきがあり、それを踏まえた日本語教育を早く実践したいと思ったからです。教え子が日本語を学ぶ動機で多かったのは、「就職に活用したい」というものでした。そういう学生にとって何が大事なのかを考えながら活動していったところ、「正しい日本語を身につけたか」よりも、「日本人と話すときに良いイメージを持ってもらえるような日本語を身につけたか」の方が大事だと考えるようになりました。例えば、「いいえ、いりません」と断るのと、「ごめんなさい、ちょっと」と断るのを比べると、前者は「正しい日本語」だけれども、後者のほうが柔らかな印象を与えます。私が現在日本語教育を行っている相手は日本人とかかわることが多い人たちなので、この気づきを念頭に置いた指導をしています。

B 私は日本語教育の経験が浅い状態で協力隊に参加したので、おそらくお二人はすでに派遣前から理解されていたであろう「日本語教育のすばらしさ」をしっかり理解できたことが、協力隊での一番大きな気づきだったのではないかと感じます。それは、日本語を教える場合、相手は自分とは違う環境で育ってきた人であるがゆえに、教える側も世界が広がるというすばらしさです。現在も日本語教育の仕事を続けているのは、そうした気づきがあったからだと思います。携わっているオンライン授業の受講者は、米国やヨーロッパを中心とする世界各地の方々で、学習動機で多いのは「日本の文化が好き」などです。必要に駆られたわけではないのに日本語を勉強しようと思っている世界各地の方々と出会えるのは、今の仕事の醍醐味だと感じています。

C 協力隊に参加する前に日本語教育に携わっていた際は、「廊下を走る」と「廊下で走る」は何が違うかをいかに上手に説明するかなど、日本語の規則や形のおもしろさについて知恵を絞ることが好きでした。しかし、協力隊で初めて「日本語教育の現場」「日本語教師の養成」「教育行政機関」というさまざまな角度から1つの国の日本語教育にかかわる機会を得たことで、学習者の背景に目を配ったうえで、その学習者にはどのような指導が必要なのかを考える視点を得たと感じています。そうした視点に立ち、私が現在携わっている日本語授業を見れば、一番大事なのは「廊下を走る」と「廊下で走る」の違いなど文法を効率的かつ正確にわかってもらうことではなく、「日本語」というツールで楽しい時間を過ごし、それを支えに日々の苦労を乗り越えていってもらうことではないかと思います。

今後のビジョン

A Bさんは他国の学習者を対象とする日本語教育をオンラインでされていますが、実は私も今年中に海外に移住しようと考えており、そのために、移住しても続けられるオンラインの仕事だけに絞ることを進めてきました。しかし、コロナ禍が去った後はやはりオフラインでの日本語教育に携わりたいので、そのポストが見つけやすいヨーロッパの国への移住を予定しています。

B 今後についての私の一番の関心事は、先ほどお話しした継承日本語教育です。私が今暮らしている国では、何もしなければ継承日本語教育が先細る一方なのは確実です。そうしたなか、協力隊員としてよそ者の立場でここにやって来て、この課題に興味を持ってしまったからには、それを何とかするための力になっていきたいと思っています。

C 私は20代にヨーロッパ、アジア、大洋州と、興味の赴くままに海外のさまざまな地域で日本語教育に携わってきました。そのため、30代はこれまでに蓄えてきた日本語教育の専門性や経験を地元のために還元しなければと思い、現在の仕事を選びました。日本語がほとんどできない外国人住民の方々に、「日本語」というツールを使って楽しい時間を過ごしてもらえることが楽しいので、ゆくゆくは自分で喫茶店を経営するなどしながら、そこで日本語教室を開いて地域の外国人住民の方々とゆったりとした時間を持てればと考えています。 C

Pick Up OB·OG会

「派遣国」や「職種」など、何かしらの共通項を持つ協力隊経験者によって構成するOB・OG会を、シリーズでご紹介していきます。

青年海外協力隊 東京OB会

会の目的

■青年海外協力隊員など国外で活動している日本人を支援する
■日本を訪れている外国人を支援する
■国内でボランティア活動をしている団体を応援する

主に東京都在住の協力隊経験者で構成される当会が設立されたのは1976年。コロナ禍に入って一部は中断しているが、これまでいくつかの活動を地道に継続してきた。その1つは、外部から講師を招いて協力隊事業などについて学ぶ勉強会。月に1回のペースで開催してきた。中高生を対象とするパラオへのスタディツアーは、毎年1回の恒例行事となっている。

千葉県木更津市郊外にある民間の児童養護施設「野の花の家」の支援も、1998年から20年以上にわたって継続してきた活動である。毎年夏にはバーベキュー交流会、冬にはクリスマス会を開き、当会会員が施設の利用者や元利用者と交流している。同施設の理事長は開園する以前からインドシナ難民の子どもたちの里親になるなどの活動をしており、82年からはその支援を当会の野村代表を含む協力隊経験者数人が開始。85年に開園した後からは当会として同施設の支援に取り組むようになった。同施設で活動をする際には、パラオの活動と同様、スタディツアーの趣旨で高校生や大学生を招くこともあり、参加した大学生が社会課題への関心を深め、その後協力隊に参加した例もある。

「家族と暮らせない子どもの支援をはじめ、当会はこれまで国内の社会課題に関する活動に力を入れてきました。今後もそうした方針のもと、若い世代の協力隊経験者の力や知恵を取り込みながら活動を続けていきたいと考えています」（野村代表）

財団法人小野田自然塾（現・一般財団法人小野田記念財団）の理事長だった故・小野田寛郎氏（前列中央）を講師に招いて当会が開催した講演会の参加者たち

Outline

正式名称	青年海外協力隊東京OB会
設立時期	1976年
法人格	任意団体

Organization

代表者	野村一成 （マラウイ・養鶏・1978年度2次隊前期）
会員数	約200人
入会資格	会の趣旨に賛同する人
会費	2000円／年

Management

最高意思決定機関	会員総会
会員総会の頻度	毎年6月に開催
役員会の頻度	毎月1回開催
会員・役員間の主な連絡手段	メーリングリスト・対面会議

Contact

問い合わせ窓口	■nomura@asahishokuhin.co.jp ■080-9863-0346 ■https://tokyo-exjocv.com/contact
情報発信の手段	■https://tokyo-exjocv.com

ICT 海外ボランティア会

会の目的

■会員相互の交流を促進する
■国内外の企業などと交流し、その支援を行う

2021年2月に開催したサロンの様子

JICA海外協力隊経験者を中心に、ICT（情報通信技術）分野の国際協力や国際ビジネスに携わったことがある人、あるいは現在携わっている人などで構成される当会が設立されたのは2008年。活動の中心は、ICT分野の国際協力や国際ビジネスに携わる人や企業を支援するため、海外のICT事情などに関する情報を発信することである。

発信方法の1つは、ウェブサイトで公開している会報。年に6回発行している。もう1つは、当会会員や外部の専門家が講師となるサロンである。コロナ禍に入ってからはWeb会議のみで行っているが、以前はWeb会議とリアル会議のハイブリッドで行っていた。頻度は2カ月に1回程度で、会員以外の参加も受け入れている。「タイの通信会社」「世界におけるサイバー攻撃の動向」「工学系高度人材育成の動向と海外との比較」「ヘルスケアICTサービスの基礎と新興国市場への展開」など、扱うテーマは多岐にわたっている。現在は、サロンの参加者が1対1で交流を図ることができるよう、終了後に「個室」も設けている。

「当会には豊かな経験を持つ80代の会員も多数おり、サロンは気楽な雰囲気でありながら、知的な刺激を受けることができるものになっていると思います。サロンの予定は当会のウェブサイトに毎回案内を出していますので、海外のICT事情に興味がある協力隊員の方々にはぜひ、気軽に参加していただきたいと思います」（山川博久事務局長）

Outline

正式名称	ICT海外ボランティア会
設立時期	2008年
法人格	任意団体

Organization

代表者	石井孝（シニア海外ボランティア／タイ・電気通信・1999年度派遣）
会員数	約500人
入会資格	■正会員：ICT（情報通信技術）分野の国際協力・国際ビジネスに携わったことがある／携わっている法人、団体、個人 ■賛助会員：会の趣旨に賛同する人
会費	なし

Management

最高意思決定機関	会員総会（名称は「年度末運営会議」）
会員総会の頻度	毎年2月に開催
役員会の頻度	毎月1回開催
会員・役員間の主な連絡手段	メーリングリスト・Web会議

Contact

問い合わせ窓口	■info.ictov@network.email.ne.jp ■https://ictov.jimdo.com
情報発信の手段	■https://ictov.jimdo.com

先輩隊員たちが振り返る
就職活動の記録。

先輩隊員の
シューカツ記

今月の業種：
民間企業
（製造業）

就職先：

フジクリーン工業株式会社

事業概要：浄化槽・産業廃水処理ユニット・ブロワ（＊）の開発・製造・販売・設計・施工・メンテナンス

＊ブロワ…送風機。浄化槽では、汚れを分解する微生物に酸素を供給するために使われる。

今月の先輩隊員：宮野幸恵（みやのゆきえ）さん

出身地：千葉県
職種：PC インストラクター
生まれた年：1984 年
派遣国：ソロモン
任期終了時年齢：34 歳
隊次：2016 年度2 次隊

現在の所属先：技術管理部 技術管理課

海外向け浄化槽の設計・施工に関する業務、産業廃水処理ユニットなどで使う大型管体の国内外への発注業務、知識・技術の向上を目的とする社員向け動画教材の作成などに携わっています。

「フジクリーン工業株式会社」ウェブサイト
▶https://www.fujiclean.co.jp/

略　歴

- 2006年～、ホテル勤務のかたわらで建築の専門学校に通う
- 2008年～、建築意匠設計に従事
- 2016年10月、青年海外協力隊員としてソロモンに赴任
- 2018年10月、帰国
- 2019年10月、フジクリーン工業株式会社に入社

協力隊時代の活動を教えてください

CADソフトの授業を行う宮野さん

首都ホニアラにあるドンボスコ職業訓練校に配属され、CADソフト＊やパソコンの基本操作を教える授業を担当しました。

＊CADソフト…コンピュータによる設計（CAD ／キャド）のためのソフトウェア。

協力隊経験を応募書類にどう表現しましたか？

汚水処理に関心を持つようになったきっかけが協力隊経験にあったことを、「生活排水が垂れ流されている川や海で子どもたちが遊び、女性たちが洗濯をしていたことが衝撃的だった」といった具体的なエピソードと共に記述しました。

就活で特に苦労した点は？

当初は「早く進路を決めたい」という焦りが強すぎて、手当たり次第に求人情報を探してはさらに不安がかき立てられるという悪循環に陥ってしまいました。その後、「できる限りのことをやって、後は運命に任せよう」という覚悟ができたため、現在の勤務先に応募する際は、落ち着いて企業研究や自己分析に取り組むことができました。

現在の仕事のやりがいを教えてください

海外案件に携わる機会を与えられ、関連部署と協力しながら、現地の方々による浄化槽の適切な施工や維持管理のために働けることにやりがいを感じます。また、現地の方を一方的に指導するのではなく、海外拠点を通して現地の実情や要望を伺い、現地の方と協力しながら歩んでいる点は協力隊活動と重なり、うれしさを感じます。

今後の抱負をお願いします

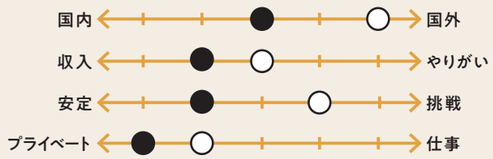
当社の浄化槽は海外でも多く導入されています。今後も、安全で適切な施工の実施と定期的な維持管理の定着を目指して、現地の方々と共に取り組んでいきたいと思っています。

自己分析

強　み	■行動力 ■創造力 ■順応性 ■建築設計の経験
弱　み	■汚水処理に関する知識や経験がなかった
資　格	■二級建築士

仕事選びの今昔。重視したのは？

協力隊参加前＝●　協力隊参加後＝○



就活の方針は？

協力隊時代の派遣国で生活排水が川や海に垂れ流されている状況を見て汚水処理への関心が高まったことから、資格や業務経験があった「建築」と「汚水処理」の両方に関連する仕事を探すことにしました。さらに、「協力隊経験が生かせるか」「海外にかかわることができるか」という点も重視しました。

MESSAGE

勤務してきた各企業や協力隊での経験で得たものを洗い出し、どの過程も無駄ではなかったと伝えようと努めたことが、成功要因の1つではないかと思っています。ぜひ、それまでの経験で得たものの洗い出しは入念に行ってください。

就職！

帰国の1年後

応募…1社
書類審査通過…1社
内定…1社

内定

帰国の9カ月後

GOOD WAY!

面接の前に、あらためてウェブサイトなどにある情報から実際に携わるかもしれない業務についてイメージをふくらませ、どのような場面で自分の知識やスキルが生かせそうかを明確にしておきました。

面接

現在の勤務先の面接では、**「略歴」「今後、海外勤務ができる企業に転職することは考えているか」「前職で苦労したことと、それに対してとった策」**などについて聞かれました。「汚水処理技術についての知識を身につけ、海外の汚水処理のレベルアップに貢献したい」という、現在の勤務先を志望する明確な動機があったため、面接ではその思いをありのまま伝えました。

帰国の8カ月後

GOOD WAY!

協力隊経験について記述する場合は、採用担当者が協力隊事業や途上国の事情に詳しくないことを想定して、わかりやすい具体例を挙げるのが良いと思います。

書類審査

現在の勤務先に提出した書類は**履歴書・職務経歴書**です。私は数回の転職経験があったのですが、それがマイナスの印象を与えてしまわないよう、協力隊参加を含めていずれも前向きな理由での進路選択であったこと、勤務してきた各企業での仕事や協力隊活動で直面した苦労とその解決策、そうした経験を通じてどのように成長できたかなどを明記するよう心がけました。

帰国の7カ月後

情報収集

主に**JICAの国際キャリア総合情報サイト「PARTNER」**で求人情報を集めました。当初は早く進路を決めたいという焦りもあり、さまざまな転職サイトを閲覧しました。しかし、あまりに多くの求人情報に触れたことで、どの方向に進むべきかに迷いが生じてしまったため、閲覧するのは「PARTNER」に絞ることにしました。

GOOD WAY!

「PARTNER」に求人情報を載せている企業は、協力隊経験を有益なものと捉えているところが多いため、そうした企業に就職したいという方に向いた求人情報にたどり着きやすいと思います。

帰国直後から

シューカツ START

JICA海外協力隊ウェブサイト「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
▶https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。
※カウンセラー／相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが　持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの現在の活動・仕事を紹介します。

一般社団法人
「S.C.P.Japan」
共同代表

井上由惟子（いのうえ ゆいこ）さん
●ブータン
●体育
●2015年度1次隊

多様性ある社会をつくる人材をスポーツで育成

ブータンで体育隊員として活動するなか、「弱さ」を自分らしさの一部として受け入れて生きても構わないのだと思えるようになったという井上さん。その経験から、「誰もが自分らしさを保ちながら歩んでいける社会」をつくるために貢献できる人材を、スポーツを通して育成する団体を設立した。

❶国連の「開発と平和のためのスポーツ国際デー」である2021年4月6日にS.C.P.Japanが開いたオンラインイベント。「開発と平和のためのスポーツ」をテーマにしたパネルディスカッションなどを行った　❷「ハッピーサッカー教室」で子どもたちによる話し合いのファシリテーションをする井上さん

PROFILE●いのうえ・ゆいこ
1991年生まれ、千葉県出身。中学時代に当時日本女子サッカーリーグに所属していたジェフユナイテッド市原・千葉レディースに入団。トップチームのミッドフィルダーとして87試合に出場し、22得点を上げる。引退後の2015年6月、青年海外協力隊員としてブータンに赴任し、小学校で保健体育授業の支援に取り組む。17年6月に帰国。筑波大学大学院に進学して研究に取り組むかたわら、20年5月に元女子サッカー選手3人で一般社団法人S.C.P.Japanを設立し、共同代表に就任。

「この教室では上手にはなれません」。子どもを入会させたいとやって来た保護者を、こんな言葉で煙に巻く「サッカー教室」を開いているのは、2020年5月に設立された一般社団法人S.C.P.Japanだ。共同代表を務めるのは、ブータンで体育隊員として活動した井上由惟子さんである。

S.C.P.Japanが目指すのは、「誰もが自分らしさを保ちながら歩んでいける社会」をつくるために貢献できる人材を、スポーツを通じて育てることだ。サッカーをはじめ、スポーツ競技の中には「走る」「投げる」「蹴る」などシンプルな動作ができる人なら誰でも参加し、楽しめるものがある。運動能力が高い子と低い子、障害がある子とない子などがそうした競技に一緒に取り組む機会をつくり、違いがある人と共に歩む力を子どもたちに身につけてもらう。そんな形でスポーツを活用しようというのが、S.C.P.Japanのコンセプトである。

活動の柱の1つは、「ハッピーサッカー教室」と称した子ども対象のサッカー教室の開催だ。運動が不得意な子でも疎外感を持つことなく参加できるよう、スキルアップを目指すトレーニングなどは行わず、試合に終始する。しかもそのルールは公式のものをそのまま使うのではなく、「どのようなルールにすればみんなが楽しめるか」を子どもたちが話し合い、その日の試合のルールを決める。「得意な子はシュートをしてはいけない」「不得意な子がシュートを決めたら2点とする」。そんなアイデアが出ると、「そういうルールで不得意な子は本当に楽しめるだろうか？」「そんなルールはつまらない」などと反論が出て議論は紛糾する。しかし、コーチは「ファシリテーション」に徹し、子どもたちに着地点を見つけ出させる。

「子どもたちの議論の衝突も大事にしています。彼らが将来、違いがある人同士が共生する社会をつくるのに貢献するためには、衝突を乗り越える力を身につけておくことが必要なはずだからです」

ブータンの子どもたちの夢

井上さんは、日本女子サッカーリーグに所属していたジェフユナイテッド市原・千葉レディースのトップチームで中学時代から活躍し、その後、アンダーカテゴリーの日本女子代表にも選ばれた女子サッカーのエリートだ。しかし、21歳という若さで引退する。

「ひたすら競い合う競技スポーツの世界を楽しめるだけの心の強さが私にはなく、向いていない世界だったのだと気づき、引退を決意しました」

引退時、井上さんは日本女子体育大学の学生であり、卒業後の第一歩として選んだ進路が協力隊だった。その選択を後押ししたのは、井上さんと共にS.C.P.Japanを立ち上げた野口亜弥（のぐちあや）さんである。野口さんもスウェーデンのプロチームなどでプレーした元女子サッカー選手。井上さんが引退した翌年に引退した野口さんは、スポーツを通じた社会づくりに関心が強かったことから、すぐさまザンビアに渡って半年間、インターンとして現地NGOの活動に参加した。女性がサッカーをする機会をつくり、その際に性教育などを行ってエンパワーメントを図る活動だ。野口さんからその話を聞き、競技スポーツにはない可能性がスポーツにはあるのだと知った井上さんは、それを追求したいと考えるようになった。その後、途上国でスポーツがどのような存在であるかを知るための手段として選んだのが協力隊だった。

派遣されたのはブータンの小学校で、保健体育の授業を行うことが主な活動だった。あるとき授業のなかで、子どもたちに「夢」を書いてもらった。すると多くの子どもが、「今と同じように、家族を大切にしながら生きていきたい」と書いてきた。それを見て井上さんは、「現状」を迷いなく肯定する姿に感銘を受けた。

「そのときに初めて、成長ばかりを求めるのではなく、現状を肯定しても構わないのだ、私は『心の弱さ』を自分らしさの1つとして生きても構わないのだと思えるようになりました」

「まとまらない」に耐える

協力隊経験によって「誰もが自分らしさを保ちながら歩んでいける社会」をつくることへの関心が高まった井上さんは、帰国の2年後、そうした社会をスポーツを通してどうつくるかについて研究をするため、筑波大学大学院に進学。さらに、その実践にも取り組みたいという気持ちが強かったことから、同じ関心を持っていた野口さんを含む元女子サッカー選手3人でS.C.P.Japanを設立。サッカー教室など子どもを対象とする活動と並行して、大人を対象に社会の多様性とスポーツのかかわりについて啓発する活動も行っており、そうした活動は主に野口さんが担当している。

井上さんがサッカー教室でのファシリテーションで重視しているのは、「導きすぎない」という姿勢だ。

「互いの考えを理解しつつ、その違いを前提として着地点を見つけ出すためには、それぞれが自分の考えを安心して表現できる環境であることが必要となります。その点、『きみが言おうとしているのはこういうこと？』などと発言を誘導してしまうと、そうではない考えを持っている場合に『自分の考えは間違っているかもしれない』と口にするのをためらってしまうでしょう。しかし、発言を誘導しないでいると、その日の試合のルールを決める話し合いなどはなかなか結論がまとまりません。そのため、私は当初、発言を誘導しがちだったのですが、徐々にそれを抑えることができるようになってきました。『まとまらない』という居心地の悪さに耐え、そうした状態のなかで忍耐強く他者の考えに耳を傾け続けることこそ、『多様性』がある社会をつくるうえで必要な根本姿勢だとわかってきたからです」

JICA海外協力隊の

つぶやき

お題 ▶ 身だしなみ

イラスト＝牧野良幸

今月の1枚

まずはボディメイク

知的障害児が通う特別支援学校で「身だしなみを整えよう」という授業をした。「シャツのボタンを留めよう」「シャツの裾をしまおう」……おなかが出ていてできない子がいる！　そこでまずはボディメイクをと、ウォーキング部を発足。毎日昼休みに30分間、とにかく歩き続けることとした。すると、うまく歩けない子の手を別の子が取って歩くなど、普段の授業にはない光景が見られる癒しの時間となった。

ペンネーム：もーりー さん（アフリカ・障害児・者支援・2018年度派遣）

★ドレスコード

任地の人々の普段着は、Tシャツにズボンや巻きスカート、サンダルが定番。しかし、知人宅への訪問やお祈りの日には、男性はシワのないシャツに磨かれた靴、女性はドレスにパンプスという出で立ち。そのギャップが衝撃的だった。私がどのような場面もTシャツとコットンパンツで臨んでいたところ、現地の女性陣から「もっとおしゃれをしなさい」と茶々が入った。

ペンネーム：ムホザ さん
（アフリカ・コミュニティ開発・2017年度派遣）

★そんなに大事!?

派遣国の女性にとって、ネックレスやイヤリングなどの「アクセサリー」は重要だ。付けないまま出勤し続けていると、同僚から「早く買いなさい」と言われた。ある日、汗をかきながら「飲料水を買ってくる」と言うと、「水じゃなくてネックレスを買っておいで！」という同僚の声が。そんなに大事だったのか……。思い直し、以来、アクセサリーを付けることは欠かさないようになった。

ペンネーム：ドキドキドンキー さん
（アジア・小学校教育・2018年度派遣）

★★あれ？ 同一人物？

「ん?! この人この前会った人だっけ……?」。配属当初はよく戸惑っていた私。なぜならみんな、髪型がコロコロ変わるのです。髪型のオシャレにこだわる女性たち、カツラや付け毛を駆使して、日によって長さや色を変え、雰囲気がガラッと変わることも。でも常夏の国で暑くないのかしら？　どの国でも「オシャレは我慢」なのね、と思うのでした。

ペンネーム：みかん さん
（中南米・青少年活動・2016年度派遣）

募集中のお題
「寄り道」「幽霊」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきがイラストになるかも！？

JICA広報誌がリニューアル

途上国が向き合う課題や、その解決に取り組む人々を紹介するJICAの広報誌として、2013年から月刊誌『mundi』が発行されてきましたが、21年6月より、誌名を『JICA Magazine』に改めた後継の隔月誌にバトンタッチされました。これまでと同様、紙媒体の発行は続ける一方、インターネットで音声や動画をダウンロードできるサービス「Podcast」を使った、協力隊員などが体験を語る生の音声の配信も開始します。協力隊員の活動を紹介するコーナーは「JICA海外協力隊 MY STORY」というタイトルでリニューアル。初回にご登場いただいたのは、シニア海外協力隊員の金沢正文さん（マーシャル・廃棄物処理・2017年3次隊）です。

左：『JICA Magazine』の表紙　中：「JICA海外協力隊 MY STORY」　右：『JICA Magazine』のQRコード

高校生･大学生を対象とした「バーチャルツアー&ワークショップ」を開催

JICA地球ひろばでは2021年5月22日に高校生と大学生を対象とした国際理解教育イベント「集まれ！全国の高校・大学生！《JICA地球ひろばバーチャルツアー&ワークショップ》」を開催しました。ワークショップでは、モザンビークで協力隊員として識字教育の支援に取り組んだJICA地球ひろばの地球案内人が紹介する活動事例をベースに、SDGsの「ゴール4」を達成するために必要な取り組みについてのディスカッションが行われました。

JICAセントルシア事務所で協力隊派遣25周年の記念事業を展開

1995年11月に協力隊員の派遣が開始されたセントルシアは、2020年に協力隊員の派遣開始25周年を迎えました。カリブ海地域では、ドミニカ共和国とジャマイカに次ぐ3番目の派遣開始であり、03年までは教育分野の支援をする協力隊員が、その後は水産、防災、環境、貧困削減など同国のより幅広い開発課題の解決を支援する協力隊員が派遣されてきました。21年5月末現在、累計の派遣人数は262人に上ります。

JICAセントルシア事務所では、20年度より協力隊派遣開始25周年を記念する事業を進めています。記念ロゴの作成、マスクやエコバッグ、アルミボトルといった記念品の作成と配布、協力隊員の活動を紹介する動画の作成と現地のテレビ番組での21回にわたる放映などが、その具体的な取り組みです。

JICAセントルシア事務所が協力隊派遣25周年記念事業として作成したロゴや記念品

クロスロード

令和3年7月号［第57巻第6号 通巻668号］
発行日　令和3年7月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1
竹橋合同ビル

『クロスロード』はJICA海外協力隊のウェブサイトでも公開しています。

ご意見・ご感想をお聞かせください。

アイデアも大募集！

今月号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか？　ご意見・ご感想をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画のアイデアや、ご紹介いただける情報がございましたら、ぜひお知らせください。

以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活の“失敗談”をお寄せください。
- 派遣国での活動・生活に役立つ“ちょっとした技”をお持ちでしたら、ご紹介ください。
- P34に記載している「お題」で、派遣国での活動・生活のひとコマをつぶやいてみませんか。
- 日本でもつくることができる派遣国の料理のレシピをお寄せください。

eメール
一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

※本誌に掲載されている記事等の内容は執筆者の個人的見解であり、JICA の公式見解を示すものではありません。

クロスロード 2021年7月号

隊員めし おかわり！

日本でつくる現地の「めし」は活力の源

任地マカッサルの伝統料理です。ここの協力隊員は皆、着任すると同僚などから「チョトは食べた?」と聞かれ、「まだです」と言えば「じゃあ食べに行こう!」と、「あの店で食べた」と答えると「もっとおいしい店があるよ!」と、未知のお店に連れて行かれます。日本で食べてもおいしいのですが、やはり物足りなさはあります。あの暑さ、コーランの音、少し汚れたお皿やテーブル、人懐っこい現地の人々……。そんな演出の中で食べるチョトはひと味違います。早くコロナ禍が去り、多くの日本人が本物のチョト・マカッサルを味わえる日が来ることを願っています。

チョト・マカッサルが食べられる現地の店

今月の料理人

阿部春香（あべはるか）さん

（インドネシア・料理・2014年度3次隊）

●活動内容：マカッサル観光高等専門学校（南スラウェシ州マカッサル市）に配属され、調理科で日本料理の指導などに従事。

インドネシアの牛肉スープ「チョト・マカッサル」

材料（6人分）

牛もも肉（ブロック）…500g
センマイ（牛の第三胃）…500g
レモングラス…5枚
ローリエ…5枚
しょうが…5㎝片
玉ねぎ…2個
キャンドルナッツ…8粒
ピーナツ…50g
カルダモン（粉）…大さじ1
クミン（粉）…小さじ1
塩…大さじ1
こしょう…小さじ1
（以上 A）
油…分量外

つくり方

❶鍋にたっぷりの水（約2L）を入れ、牛もも肉とセンマイを茹でる。火が通ったら牛もも肉とセンマイを取り出し、茹で汁を約1.5Lだけ残しておく。
❷牛もも肉をひと口大に、レモングラスを3、4㎝の長さに切る。しょうがは輪切りにする。これらをローリエと共に❶で残した茹で汁に入れて煮る。
❸センマイを3、4㎝の長さに切り、少量の油でカリッとするまで炒める。
❹玉ねぎはみじん切りにし、キャンドルナッツとピーナツは粉砕する。大さじ3の油でAをすべて一緒に香りが出るまで炒める。
❺❷の鍋に❸と❹を入れ、20分ほど煮たら出来上がり。

ひとくちメモ

牛の内臓と多くの香辛料を使う点が特徴の料理です。どの内臓でもおいしいので、お好みのもので試してみてください。キャンドルナッツが手に入らない場合は、ピーナツを倍に増やしてください。現地では、もち米をココナツミルクと塩で味付けし、ヤシの葉でくるんで蒸す「ちまき」のような料理「ケトパット」と共に、柑橘をたっぷり絞って食べるのが一般的です。麺やライスを入れてもとてもおいしくいただけます。

今月号の表紙
ペルー

文=松下芽依（まつしためい）さん
（環境教育・2018年度1次隊）

私は学校などでごみに関する啓発活動に取り組みました。写真は、中等学校で行った環境教育の様子です。集中力が続かない生徒たちにどう対処しようかと知恵を絞って取り入れ、受けが良かったのがジェスチャーゲーム。コンポストづくりに関してごみを分解する微生物の役割を理解してもらうことが目的の、「水分」と書いたイラストを提示したら、微生物が水分を取り入れているジェスチャーをする、といったルールのゲームです。

※松下さんの活動の詳細は8～9ページで紹介しています。

2021年7月1日発行（毎月1回1日発行）第57巻第6号 通巻668号
編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1 竹橋合同ビル

JICA ジャイカ